
太平洋「魔」戦争

盆次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太平洋「魔」戦争

【Nコード】

N2001BA

【作者名】

盆次郎

【あらすじ】

日本の女子大生 斉藤深雪 は交通事故に遭ってしまい、気が付けば病院のベッド。

やれやれ助かったかと思っていたらそこは70年前、1941年でもしかも「魔法」何て物が存在する異世界ともつかぬところだった！！

太平洋戦争と同じ時代・地理だけれど「魔法」が実在するへんてこな（？）架空戦記？ファンタジー？のつもり（どっちなやねん！）
…初めてのド下手ですが頑張ります。

*主人公が強いです。

徐々に周りも強くしていきますがそう言うのが嫌な人はご注意下さい

ブログ（前書き）

初投稿。皆様の秀作読んで勢いで書いてしまいました…
頑張ります。

ブログ

斉藤深雪 18歳。

今年の春に高校を卒業し、福岡の大学に進学した彼女は。

「これでもかー！！！！！！」

今、戦いの真っ最中であつた。

「姉貴。姉貴の荷造り能力のなさは分かり切ってるんだから諦めなよ」

ばつさりと彼女の奮戦を総括したのは 斉藤実。

「姉貴の家事能力のなさは常軌を逸してるし、後かたづけに苦労するのはこっちなんだから。さっさとどいてくれ！！」言葉の二の大刀で姉を斬り捨てる愛すべき弟である。

「うるさい！！女の子の荷物には見られちゃマズいモンがあるって知つとろーがっ！！」

「……いや、姉貴。そう言って最後は俺に泣きついて幾星霜って感じなんだが？」

「うっ」

「それに姉貴の下着なんて色気もクソもねーのばっかだし」
「ひどっ！」

「否定できるんか？」

「うっうっ…」

「分かったら退け。あとは俺がやる」

「…ハイ…」

この弟、勉強の方では姉に全く適わない。それこそ足下にも何とやら。

姉、深雪は高校時代、成績は常にトップ3、女子剣道部の主将も務めて、絶大な人気を同姓からも集めていた、文字通りの才色兼備。

ちなみに大学でも現在進行形。詳しい内容は筆者の精神衛生並びに本人に自覚がないので省略。

まあさほど百合ではないので問題ないと言ってても良い。
では何故書いたのか、それは謎である。

そんな姉の唯一最大にして壊滅的な弱点こそ「家事全般」なのである。

「全般なので唯一とは言わない」とは彼女の弟の至極最もな言葉であり、

お約束のようにこの発言の直後に吹き飛ばされた。南無。

その腕前たるや

「物探しⅡ発掘調査」彼女の部屋は別名『床が見えない魔窟』である

「掃除Ⅱダンジョン」彼女の部屋は掃除するのに覚悟がいるのだ

「料理Ⅱ地獄の釜」彼女の料理は神をも殺す
という具合である。

決して誇張ではない。

調理実習で硫化水素を発生させ、呼び出しを食らった女子高生は世界広しと言っても彼女くらいなものであろう。と、言うより居たら困る。

対する弟、斉藤実の方は…容姿そこそこ、成績そこそこな高校1年生帰宅部である。

ちなみに「授業・HR終了後速やかに帰る」学生を「強化系帰宅部」というそうな。

それで行くと彼は「超強化系帰宅部」にカテゴライズされる。

何せ教師に見つからなければ「終了後、全速力で走って帰る」からである。

理由は姉が帰ってくると何だかんだで時間が潰れる（姉の無自覚の破壊活動から家を守る）のでそうしないと自分の時間が作れないからである。

普通その様な境遇ならば「偉大な」姉の存在に鬱屈した性格になる

危険もあつただろう。

（「偉大な」とは件の姉自身がのたもつた発言。）

しかし彼には唯一最大最強の「家事スキル」があった。

なぜそうなったかというところ。

姉弟の母親が家事を教えていると、本来教わらねばならぬ姉はいつの間にか飽きて逃亡。

弟が残つてまじめに聞いているのが常、デフォルト普通であつたためである。

娘を淑女、大和撫子のように育てたいと切に願う母は、最初は文字通り「引きずつて」でも深雪に家事を教えようとしたが、逃亡が3桁（くどいが誇張ではない）に迫つた段階で諦めた。

こんな訳で「才色兼備だけど家事壊滅な姉」と「平凡にして非凡な家事スキル」という世にも不思議な、なんかもの凄く、世間一般から見れば「逆だろ！！？」という感じの姉弟ができあがつたのである。

閑話休題

姉弟はこの夏休みの家族旅行の準備をしていた。

これは姉弟の合格祝いとして計画されたものであり、父親の仕事の都合でもともと春休みに実施される予定が延びて夏になっていた。

姉弟に不満はない。二人とも自分の父親が優良企業の実務職で年がら年中世界中を飛び回っている事を知っていたし、そのお陰で何不

自由なく過ごせている事をわきまえていたから。

とは言っても久方ぶりの家族旅行である。弥が上にもテンションは上がり、8月の旅行なのに早くも準備に余念がない。

……姉の方は完全なる空回りであつたが。

空回りした気合いは一回転して「グレムリンの襲撃かつ！」という
さんじょう
荷詰めになり、

そのツケは弟に100%濃縮還元される。

具体的には後片づけと書いて「地獄」になる。

それを知ってるからこそその冒頭の遣り取りであり、弟による姉の強制排除であつた。

ちなみに小学生の頃からの日常であつたりする。その間、姉の欠点
デフォルト
は解消されるところか強化されて今に至る。

「あ。そー言えば今日母さん遅いんだっけ？」

「ああ。だから今晚の飯は俺が作るよ」

「やったー！姉さんカレーが良いな」

「はいはい。」

姉弟の母親は時々帰りが遅いのでこういう自体は間々ある。

当然その場合の夕飯作りは弟に一任されている。

深雪の料理は「食べれるモノを作る」というレベルではない。

なので貴之が作るのは「家を破壊されないため」という理由からである。

「じゃあ買い物行くか。姉貴来る？」

「ん。行く行く」

姉弟は買い物へ出かける。

その行動が運命を狂わせるとは知らず。

夕刻。

姉弟は買い物に出かけた。

深雪は自宅通学の大学生であつたし、高校生の実は言わずもがなだ。

そんな訳で母親の返りが遅い時、二人は良く一緒に買い物に出かけた。

買う物を吟味し、支払うのは弟。荷物を持つのは姉である。

二人の性格を知るものならば当然の事であらう。

「こう言うのって普通男が荷物持ちじゃない？」と姉の方は不満があるようだ。

「姉貴の家事能力のなさは普通じゃないし、買い物選ばせるとまともに吟味できないし、あまつさえ安売りとか甘いモノに釣られるしあとは…」

「ストーーーーップ！！！！ 分かった、分かりました、分かりましたよー！！」

弟の発言を遮りやけ気味に叫ぶ姉。

否定する要素が全くないのでこうするしかなかったたのであろう。自業自得。

「分かれば宜しいのだ。分かれば」

「うう… やっぱり間違ってる気がする」

「自業自得だろうが」

「…否定できません」

いつもと変わらぬ役割分担、いつもと変わらぬ遣り取り。

…
ここまでは何も変わらぬ日常であった。

2011年7月18日
午後9時のニュース

「本日午後6時頃 北九州市八幡東区。の交差点で車数台が絡む事故が発生しました。

この事故で男女7名が死傷し、このうち交差点で信号待ちをしていた男女2名が意識不明の重態です。

警察が2人の身元を調べると共に事故の詳しい内容、原因などを現在捜査しています。

続いてのニュースです。
本日小倉駅で……………」

ブログ（後書き）

こんな感じですが頑張ります。
感想など頂けたら感激です。

ブログ1941

『状…は？』

『……治療は……きました。今は……ます』

どこか遠くで声が聞こえる

そう認識が追いつくと、体は動かせないながら深雪の意識が覚醒する。

『後遺症……大丈夫か？』

『……擦り傷程度でしたので……ただ、頭を……打ったので……』

『危険があるのか！？』

『いえ、打ったと言っても瘤程度です。ひびも入ってないと思われます』

『良かった……』

『とは言っても頭部を打っております。なので経過を注意して見ております。』

『大事な部下だ。宜しく頼む』

はて？

自分に上司なんて言う存在が居ただろうか？というか治療？
脳内を埋め尽くすクエスチョンマーク。

それら进行处理する事で自分のみに何があったのか、徐々に判明してくる。

（そっか…実と買い物に出て…あの交差点…光…はねられたんだろ
うなあ。で、病院に運ばれて治療を受けたと。うんうん、毎度なが
ら運が強いねえ）

剣道をしているのとは関係はないが、彼女は幼い頃から生傷の絶え
ない子供であった。

喧嘩上等！と言った感じだったので打撲程度なら結構な回数経験し
ている。

で、毎度毎度せんとひんかんかじや関係者の中で一番軽傷ですむジンクスがあった。

なので頭を打つくらいと言う事ない筈だが、今回はやけに体が
動かない。頭はほぼ覚醒してるので実質金縛り状態である。

これが交通事故というモノなのかな〜と鷹揚に構えていた（実際は
病室で寝ている）彼女だがそこでふと気がつく

（みのる実は！？あの愚弟はどうしたっ！！？？）

この女性、家事という本来女が勝つべき（と本人が思っている）分
野で適わないせいか、総じて識域下での弟の扱いが荒い。こんな状
況でも愚弟呼ばわりである。

ともあれ弟の安否が分からないとあってはオチオチ寝ても居られな
い。

覚醒した意識で無理矢理体を起動させようとする。すると何かが頬
を撫でるような感覚の後、彼女の臉がパチツと開いた。

「……………んえ？」

意外にもあつさりと解けた金縛りに拍子抜けした声を出す。
が、ほぼ同時に先ほど以上のクエスチョンマークと違和感が押し寄せてくる。

（ここどこ？これ誰？つかなんじゃこりや？？？）

先程述べたように彼女は病院と縁が深い。

縁が深いと書いて「常連客」と読む。その心は？

（知るかなもんっ！！間違いなくいつもの病院じゃないし、服装からしておかしい！）

彼女の視界に入ってくるのはベッドの上から此方を除く女性2名

一人は看護婦らしいのだが、古い。

昭和かよっ！と突っ込みたくなる格好である。

もう一人は自衛隊のような服装。

此方は親戚に一人自衛官がいた関係で分かる。だがなにか違うような気もする。

深雪が混乱している間に彼女の意識回復に気がついた2人が声をかけてくる。

「斉藤？大丈夫か？」

「斉藤さん？大丈夫ですか？」

自分の事を呼んでいるのは分かる。こっち見てるし「斉藤」と読んでいるし。

自分の事を心配しているらしい2人に深雪は答える。

神様は言いました、「嘘をついてはいけない」と。

なので深雪は正直に言った。このあと何が起こってしまうのかも考えず。

「どちらさまですか？」

瞬間、世界が凍り付く音が聞こえた気がした。

「つ、疲れた…」

すっかり発言「どちら様ですか」の結果がこれだ。

全然大丈夫だというのに2人は取り合わず、「記憶喪失か!!!?
?」「と大騒ぎ。お陰でさんざん問診やらなにやらを実施され。

深雪は疲れ切っていた。

しかし。

才色兼備を持って知られる彼女は現状を正しく認識していた。

「ここは普通の世界じゃない」と。

なぜならば

CTスキャンやMRIはないのに医者が手を深雪にかざすとそれとそっくりな画像が壁に投影された。(ただし医者が手を下ろすとすぐに消えた)

さらにはライト代わりに指の先に明かりをともした。

深雪は仰天したがさもありなん。

しかしその様子を見た3名はさらに驚いていた。

「忘れたのか？」と。

よく分からないがどうもそう言う事がまかり通るのがこの世界のようである。

となるとここは異世界で、科学技術以外の何かがあるのであろう。

早速上司殿が対処にかかる。

深雪としてはいい迷惑の気もするが、現状が分からない以上、逆らわず上手く対応するのが得策と考えられた。

「…さて、早速だが…私の名前は八田楓。君の上官で現在は海軍に出向している…んだが…覚えているか？」

「…すいません。」

「…自分の名前は分かっているんだな？」

昼間の検診のとき話したりして分かっていたのである。

「ええ。斉藤深雪１８歳…ただ…それ以外がごちゃごちゃという
か変わってるというか…」

そう、名前と年齢は変わっていなかった。ただし

「生年が大正１２年になっていました…」

「ん？何の不思議も無いだろう。今は昭和１６年なのだから…何
というか、君の記憶喪失は複雑奇怪だな…ああいや、悪く言ってる
訳ではないぞ本当に、」

そうなのであった。昼間の検診で分かってしまった事。

周囲の風景や服装などで厭な予感はしていたのだが。深雪は昭和に
来てしまっていた。

それを聞いて深雪はお約束通り「きゅう…」とブラックアウトしたが

昼間に検査結果に周囲は首を傾げていた。

元の記憶も完璧なため、一般常識、学問に関しては問題ない。

さらに出来事に関する記憶も完璧。たとえば支那事変とか

なのに、周囲の人に関する記憶がごっそり抜けていると、上司殿達
は見ていた。

少なくとも単純な記憶喪失であるか甚だ疑問の残る結果となった。

深雪からすれば歴史の授業とゲームで得た「歴史事実」が通用したに過ぎない。

それだけなら異世界ではなく昭和へのタイムスリップなのだが……

如何せん昼間の超常現象のインパクトが強すぎ、現状が良く飲み込めない深雪である。

周囲は見慣れたはずの周囲をきよろきよろおどしながら見るその様子を見て記憶喪失を確信したとか。

「斉藤深雪」という名前は変わっていないのが逆に不気味である。

悪い冗談と思いたいがそうではないらしい。

痛みはあるわ吐き気はするわ、諸々の状態がここが現実リアルである事を示している。

みのる

弟の事も気になるが、今はそれどころではない。

深雪は眩暈がしっぱなしで今にも倒れそうな幻覚に見舞われながらも辛うじて聞く

「貴方…は私の上司で、私は部下で…海軍に出向？という事でしょ
うか？」

「…うん…完全に忘れているか……」

「すいません」

「いや、いい。気にするな。取りあえずこのままじゃ君は何も出来ないだろう。」

まず、私は八田楓。現在呉鎮守府付きの海軍特務班で班長をしている。君はその班員……なんだが……忘れているんだよね……」

「はい。… すいません」

「はあ… まあ良い。本来ならば君は予備役なりして一時にしても療養して貰う所なんだが…今はそうも言っていられない。必要事項を再教育するからしつかり覚えろ。と、いうか思い出せ。」

「は、はあ…」

「返事はシャキッとせんか！……！！……！！……！！」

「は、はいっ……！！……！！……！！」

「宜しい。では始めよう」

楓班長の有難いと言うには教育的指導のきいた長——いお話は夜半に及んだ。

分かった事は

・ 斉藤深雪は八田楓率いる海軍特務班に所属し、現在川崎にある。

・ 「八田班」と呼称されるその班は班長八田楓以下女性6名からなる。残り4名は現在別の用事中。

・ 「八田班」は海軍に属するが特殊技能により艦長ないし司令官直

属となる。現在は川崎で艤装中の航母に乗り込む予定である。

「待ってください。特殊技能って何ですか？」

「特殊技能まで忘れたか……そうだな、私たちの存在意義そのものと言ってもいい」

「……なんですか。それは」

楓は告げる。

これが単なるタイムスリップではないことを示す決定的な宣告を。

「『術』とも言う。いわゆる超常現象などを発生させる、使い方の一つで毒にもなる恐ろしい力だ。

海外では『マジック』『魔術』とも言うな。我々はそれを使いこなす特務班。

斉藤深雪 君はそこの一員なんだよ」

証拠とばかりに楓は指先に明かりをとす。
夜闇に浮かぶ幻想的なそれを見ながら

（は、はは、ははははは 超展開すぎでしょ……」

深雪の意識は断絶した。

夢の中で何か不思議なモノを見た気がしたのだが、翌朝の騒動もあって完全に忘れてしまうことになる。

1941年（昭和16年） 7月18日

斉藤深雪の数奇な太平洋戦記が、始まる。

「深雪？深雪——！！！！！！！！！！」
上官殿の叫びが夜に響いた。

ブログ1941（後書き）

ご都合主義が続くかも知れません…

初顔合わせ（前書き）

早く実戦というか本番に入りたいんですが…
もうしばらくご辛抱ください。本当にスイマセン。

初顔合わせ

翌朝

「えと…皆さんおはようございます?」

深雪の朝の挨拶が微妙な感じなのは周囲にいる女性5名が原因である。

うち1名は知っている。楓だ。

上司…いや、海軍らしいから上官か。彼女が他の班員に事情を説明し、招集したらしい。

同僚と集まって何かすれば少しは記憶の回復に繋がるのではないかと希望を持って。

だが、残念ながら、集まってくれた残り4名には全く見覚えがない。ただ全員同じ軍服姿で楓の右にずらっと並んでいるところ、深雪を心配そうに見ているところを見ると…

(私の同僚なんだろうなあ…全員顔も知らん人ばっかだよ……)

記憶喪失と見られているため各々自己紹介と深雪との関係を話してくれる。

東堂恵理

楓の部下、深雪の同僚。
班では副班長。「念話」を使用して班の取りまとめをするのにこの
ポストだとのこと。

「念話って何ですか？」

この質問は予想されていたのか昨日ほど驚愕されない。とはいっても全員の顔がこわばったのは事実。

深雪はそれを見て（あ…ミスった？）と思った。

この娘、賢い。

本人は知り得ない事だが、「治癒」「念話」「斬撃」は威力、精度はともかく初歩中の初歩なのである。故に面と向かって話しているこの距離ならばたやすい筈なのである。

『これですよ、聞こえてますか？』

聞こえたなら頭の中で会話する感覚で返信をやってみてくださいな。

『

突然脳内に響く声にさらに驚愕した。

みると恵理がニコニコして此方を見ている。

『ええっと…恵理…さん？』

『はい。そうです。これが念話です。…良かったあ。出来なくなつた訳じゃないんですね…本当に…良かった…ぐすっ』

「『ええ！？』」

見ると念話でも実際の顔でも泣きそうである。よほど嬉しかったのか。

『おいおい泣くんじやない東堂。まだ油断は禁物だ。とりあえず念話は使えるようだし…聞こえているよな。聞こえたら返事しろ』

『八田さ…八田班長？』

『おお、よしよし上手く行ったな。これは互いの顔と名前を認識していれば術者同士、遠距離での通信が出来るものなんだ。』

どうやら訓練も無しに魔術の行使が出来るらしい。体が覚えていると言った方が正解か。

だが、便利と言うより自分の体に恐懼してしまう深雪。

八田班長によれば、他の4名も話しかけてはいるが、深雪の方が名前を知らないので接続できていないらしい。大急ぎで他の4名とも（初）顔合わせ。

括弧付きなのは深雪にとってはそうでも他の面子にしてみれば同じ釜の飯を食った同期な為である。

…この「釜」にも実は驚愕の事実がある、後述。

高須賀桜

班員。眼鏡を着用している。海軍は視力検査もあるらしい（深雪はそう思っている）のでこの時点で深雪の知る世界とはかなり違うの

かも知れない。…魔術がある時点で今更ではがあるが。

大山夏

班員。これと言った特徴無し…すこし言葉少な。

何でも口、歯並びでなにやら自分に不満があり、それで小さい頃から口数少なかった名残らしい。

すぐさま「どんな口なのか暴いてやろう」と考えたのは深雪らしいと言える。

山崎冬

班員。他の班員と比べると普通…だが話し上手らしい。気がつけば深雪と一番しゃべり、食べ物好みなどの雑談に突入していた。本当にいつの間にか。

『よし、これで全員で念話出来るはずだ。では念話で姓名を点呼！』

『副班長 東堂恵理！』

『班員 高須賀桜！』

『…同じく…大山夏』

『同じく 山崎冬です！宜しくお願ひします…ってなんだか不思議な気分です。』

『…ええつと…斉藤深雪です…』

『シャキッとせんか！…！…！』

『は、はいっ！！斉藤深雪です！』

『くすつ 何かいつも通りみたいですね』

『ですね副班長。いつも通りの深雪です』

『…いつも通り、色々抜けてる…深雪』

『です。まあでも良かったです。少ししたらいつも通りやれるって事ですよね？』

他の班員からの評価が若干？低いのに気がついた深雪。
恐る恐るではあるが、覚悟を聞いて質問する。

『…あのー…日頃の私ってどう思われてるんですか？』

たつぷり3秒は間が空いた。

班員達は目を合わせ、タイミングを計り、そして答える。

『成績は良いんだけど……生活能力皆無にして要注意人物』

（です）（ですねえ）『『『『『』』』』』

『やっぱりかつ！！！！！』

深雪は心の中で「そこはまんまだったんかいつ！」と泣いた。
それこそ号泣した。

タイムスリップに超常現象と何でもありなこの世界なら、そこは少しは改善されているのでは、と期待していたところあったのだが、どうもこの自体を現出した神か仏か何かはそこら辺は厳しいらしい。

聞くと昭和の斉藤深雪は料理当番に一切任命されていない。
班の食事は持ち回りで交代に作る事が多いのにも関わらず、である。

おそろおそろ聞いてみると

「あれは…我らの苦い戦訓となった…」

我らが八田班長は念話を止めて本当に、
それこそアンドロメダを見るような遠い目をするし、

「…ええ…噂は聞いていましたが…あれほどとは…」

副班長は思いだしたのか目をつぶり苦しそうにするわ

「まさか調理場が戦場になり、戦友の屍を拾う事になるとは思いも
しませんでした…

陸軍の石原さんじゃないですが、ハルマゲドンとはああいうのを言
うんでしょうね…」

冬は饒舌に悪い冗談としか思えないような話をするし。

「私の眼鏡、お陰で買い換える羽目になったんですよ？覚えてない
んですか？」

桜は信じられない、あり得ないような事実を暴露する。

「……」

ちなみに夏は一言もしゃべらず震えていた。教科書に書いたような
「ガクガクブルブル」で。ついでに顔面蒼白である。一体どれほど
の恐怖があったのか……

「……何しでかしたんですか…私？」

「ウム。あれは何年か前…」班長が語り始める。

昭和の斉藤深雪の黒歴史が、今、明らかとなる

大日本魔術今昔（前書き）

ちよつと説明だらけですが、ご容赦

大日本魔術今昔

魔術。大日本帝国において、それを行使する者は「術師」もしくは「術者」と呼ばれ、

『大日本術師協会』が一括して養成・統制している。

さて、この国の魔術師養成は 他国と同様、黎明期にある。

前近代、すなわち江戸時代以前から「術」を使える人間は文字通り「突然」出現した。

突然「力」とでも言うべき能力に目覚める事から「発現」と呼ばれ、遺伝子によるのか経験によるのか、はたまた別の理由なのかはいまだに謎である。

ともあれ全世界でその様な能力に目覚める者達が存在し、非常に珍しい事例ではあるけれど「術者」ないし「魔術師」として実在した。

どれくらい珍しいかというところ『大日本術師協会』に登録されている、すなわち日本にいる術師は全部で42名にすぎない。

これは、「存在の承認」、養成・育成が世界全体で明治以降を待たねばならなかった事によるものである。

前近代において、西洋ではその様な技術を発現させた者は「魔女」とか「魔法使い」と呼ばれた。

後者が権力者に取り入るなどした例も少数あったが、前者、「魔女」はほぼ確実に、男尊女卑の傾向もあって情け容赦のない凄まじい迫害を受けた。

いわゆる「魔女狩り」である。

これは中世、ペストや飢饉に見舞われた社会不安で一層残酷になり、熾烈を極めた。

無論 術を使える事が「恵みをもたらす」、具体的には食料を虚空から出したりする事もあったが、一般の人々から見れば結局「不気味」「理解不能」なものであり、教会権力の強かった当時、容易に「悪魔」と結びつけられた。

彼女たちは夜、箒に乗って「サバト」に集まり悪魔と淫行に及び、よってその力を譲渡されたのだとされ、ありとあらゆる拷問、虐殺の対象となった。

これは迫害の初期、どうにかしようと彼女たちが互助協会のようなものを作ろうと開いた集会が誤解されたのではないとも言われている。

ともあれ西洋において魔術師の歩んだ歴史は茨どころか地雷原であった。

それこそかのロンメルが北アフリカに構築した地雷原レベルの。

日本においてもその様な「不気味な」人間は100%確実に「村八分」となり、追放されるか一切の援助、強力を受けられない境遇に追いやられ、酷い場合は文字通り袋だたきにあつて全てを失つた。

その中には当該人物の生命すら含まれる事がざらであつた。

さらに不運な事に西洋の魔女狩りの情報が一部誤つて入つてきて、その様な術を使う人間は「耶蘇邪教と繋がりのある者」と認識された時期もあつた。

こういう訳で全世界的に「魔術」を使う人間は迫害を受けてきた。例外的に中南米やアフリカなど、一部ではそう言つた者を「シャーマン」として崇めたり、政治指導者とするところもあつたが、そう言つた魔術師の多くは大航海時代以降の植民地化の中で真つ先に「侵略」されて果てた。もつて瞑すべし。

それゆえ西洋、東洋において魔術を行使する人間は自分たちの能力を隠す事に徹し、それぞれ互助協会を作り上げて明治に至る。隠す事に特化せざるを得なかつたため、技能の伝承、育成は困難を極め当時行われていたとされる「詠唱」「魔法陣」の技術は後世に

伝承されなかったと言われている。

日本の戦国時代になると西洋では「魔術」への認識変化が起こっていた。

洋の東西を問わず魔術のポピュラーな使い方として「治癒」がある。

これが大航海時代、敗血症などの病に苦しんでいた船乗りの絶大な支持を受けた。

この時の魔術師が男性だったのも幸運だったと言えるよう。

またこの魔術師、「食料」を作り出す事も上手だったので船乗りからの支持は船長をも上回った。

かくて西洋の魔術師、術者達は日陰者からの脱却に徐々にではあるが成功する。

ただ、本当に魔術を使える人間は非常に少なかったのと、依然として魔女への恐怖、差別が続いた事。そして前述の理由により、後身への指導は昔ながらの「徒弟制」の如き状態で細々と人里離れた田

舎のさらに外れの山奥の（以下省略）で行われたので遅々として進まず、完全なる伝承は困難であった。

日本でも明治維新以降、海外の情報を取り入れ、それまでとは一転して術師の保護、育成にあたった。

大日本帝国政府の要請を受け、——紆余曲折はあったものの——それまで全国各所にあった術師の互助組織が集結して作られたのが『大日本術師協会』であり、その管理、統括のもと、日本中の術師が集められ、ノウハウの確立と後身育成の任に当たる事となった。

資源も戦力も乏しいこの国にとって術師は戦闘の勝敗を左右しうる存在であり、その育成が国家の急務にして至上命題であると認識されたからである。

が、如何せん人数が非常に少なかった。

昭和16年現在、日本にいる42名のうち、養成中なのは4名。いかに「発現」が珍しく後身育成が困難かお分かり頂けるであろう。

協会を卒業した術師は「出向」と言う形で陸海軍に協力する。

八田班も昨年度までは養成段階であつたが、今年度から海軍に向向する形となっている。

これは上記のように絶対数が少ないため柔軟に運用する必要がある事と、陸海軍の士官、兵士教育とは相容れないものが多かった事に起因する。

魔術の行使には「精神」「心理」が非常に重要なウェイトを占めるのは最初期から明確な事とされていた。

それゆえ陸海軍の教育ではその「精神」「心理」に悪影響を及ぼしかねず『大日本術師協会』しか術師の教育は行い得ないとされていた。

ところで明治以降の魔術——「近代魔術」と呼称される——は実は「詠唱」だの「魔法陣」だのは一切必要としない。というより使わない

必要なのは「術師」の「イメージ」「概念」である。

イメージする力が強ければそれだけ大きな術式が可能となる。

これが現在の近代魔術である。

術師育成に関わる人間、特に科学者は、魔術師は脳で常人とは異なる特殊な、「高度な演算」をしているのではないかと推測している。

そして、その演算を旧時代では「詠唱」「魔法陣」で代用していたのではないかと推測する研究論文が明治2年、英国で発表された。

これは世界中に大きな衝撃を与えた。
なぜなら。

この論文内容が事実だとすれば、その「詠唱」「魔法陣」その他を復元し、科学的に解明する事が出来れば――

一般の人間、兵士にも魔術の行使が可能となる可能性があるからである！

世界中でこの論文を実証しようと言う研究が競って行われた。日本でもこの仮説を実証できないかと、——日本では「式神」など陰陽道の道具に着目した例も多い——多くの学者が取り組んでいるが、未だ成功した者はいない。

故に現在でも魔術師は「徒弟制」であり『大日本術師協会』の独占にして本当に突然、偶然にも「発現」したわずかな「発現者」のみに限られている。

そんな訳だから八田班にとって深雪が今までと同様に魔術を行使できるのは非常に喜ばしい事であった。

もし行使できないのであれば当然深雪を放逐せねばならない。

さらには軍事機密の保持を理由に軍から行動を監視されるであろう。

無論『大日本術師協会』も彼女を監視するのは確実であり、最悪「処分」する可能性すら十分にあった。

ゆえに「念話」が使える事が判明した時点で斉藤深雪は今まで通り「魔術師」であることが認められ、生きていける事が決定したと言つて過言ではない。もつとも、どれくらい使えるのかはこれから判明する事になるのだが。

とりあえず、彼女が『協会』でしかした武勇伝を聞く事しよう。

「……何しでかしたんですか…私？」

「ウム。あれは何年か前…」班長が語り始める。

「協会は寮制でやってるんだが、その料理当番で君はやらしかしてくれてなあ。」

なんだろう、どっかで聞いた事がある。

… ああそつだ。高校の調理実習で硫化水素発生させたんだつた。
まあでもそこまでは酷く……

「まさかホスゲンを発生させるとは思っても見なかったぞ」

硫化水素の遙か上を行く、毒ガス製造事件であつた。

この事件で協会の人間がほぼ全員6週間の病院生活を余儀なくされた。

どういふ訳か本人は全く気づかず料理をしていたらしい。

できあがったのは何故かやけに^{オリハルコン}見事な金属塊だったらしいけれど。

大日本魔術今昔（後書き）

長い説明文ですいません。

これで次回以降主人公達が動けます。
帝国海軍はまだ動けません。

もう一寸待ってください。

斬撃（前書き）

どうしてだろう…全然進まない…

斬撃

「よし、念話が使えらる言う事は術の行使は出来らる言う事だ。本当に良かった」

そこで、だ。

朝食後、一通りの術式試験を行う。その成績を見て、今後の色々を決定する事にしよう。」

「…あつさり流された…私…そんな恐ろしいモノを…」

ホスゲンは現在でも法律規制を受ける毒性の強い薬品で第一次世界大戦では毒ガスとして使用された歴史を持つ、気管系に被害をもたらす毒性の強い薬品である。

「了解しました。試験方式はいつも通りで宜しいのですね？」

「ああ、副班長に任せる。場所は伝手があるんで連絡する。」

「了解！」

「…術式試験、頑張つて…」

「あー、あれ、面倒で無駄に疲れるからねえ、まあ頑張つてー」

「うん。あれ本当に疲れる。」

「では、始めよう」

場所は近くの軍施設練兵場。ようするにグラウンド。

今日は日曜なので使えるらしい。もちろん諸々の手続きを踏んでは

いるが、結構アツサリ行った。

理由は「術師の訓練？ほう、そいつは珍しい。今日は使う予定もないし後学のために（と言う建前で）見学させてもらえるならばどうぞ使ってください」と言う遣り取りがあったりする。

術師は日本で38名しか存在しておらず（4名は京都で勉強中…）かつ単独行動はなく大体6、7名の「班」で行動するため、日本の術師を見られるのは8箇所のみ。

うち3カ所は中国大陆のため、内地では5つしかない。

それについても一つは「医療特化班」のため、軍人等が見たがる派手なものは不得手としている。

ちなみに深雪を診察して人間MRIをしたのは彼らである。

ちょうど別の用事来ていたので診察して貰ったのであった。

中国にいるのは言わずもがな、日中戦争（支那事変）への参加である。

そんな訳で八田班の急な要請はむしろ大歓迎であった。

魔術なんてのは本当に一生に一度見られるかどうかと言う代物なのである。

「まずは斬撃。」「治療」「念話」「斬撃」は一番ポピュラーでかつ初歩とされる。

念話はさっきやったし、治療はその為に怪我人を作るを作る訳にも行かん。」

そう言つて楓が示したのは練兵場の向こう側におかれたわら束。

標的である。

「最初は400メートルから斬撃を振つてくれ。徐々に近づきながら計測する事で射程、威力が分かる様になっている。」なるほど明治以降、魔術をどうやって計測するかは手探りながらも進歩してきたらしい。

「斬撃ってどういう感覚でやれば？」

深雪は当然分らない。ゲームでやるのとは勝手が違う可能性があると思つての質問だったが…

「そのままだ。雷なり炎なり、氷なり、人にも依るがともかく「遠くの敵を薙ぎ払う」感覚でこう、ズバーツとだな…」

「…班長、いつもですがアバウトに過ぎるのでは？」副班長の恵理も呆れるくらいアバウトな説明を班長は下さつた。

恵理に再質問したところ

「まあ、大体班長の行つたとおりなんだけど…なんて言つかこう、もっと繊細というか注意してと言つか…」

上手く言語化できないようである。

「まあ、やってみるしかないだろ！」

楓班長の実に男らしいゴーサインである。

魔術に興味津々な深雪に否やはない。

「でだ、理論上は手刀でも「斬撃」を飛ばせるんだが、どうしても何かモノをもってやった方が上手く行く。君は刀を愛用していたかな。持ってきたので先ずはこれでやって欲しい。」

魔術は理論に依らないところが多々存在するがこれもその一つ。どういう訳か手に何かを持ち、それを振ったりした方が上手く行く。「イメージしやすい」からではないかと考えられている。

たとえばピストル。

遠距離に術式を行使する術師は銃身の長い空砲を使用する。実包は使う必要がない。

短距離で広範囲に一度に行使する場合は散弾銃を使用する。同じく空砲で。

むろん慣れてくると散弾銃でも長距離射撃は出来るし、逆も然り。

慣れてきた術師は自分にあつた「愛機^{あいき}」を決め、何でもそれ一つでやれるようになる。

八田班の面々も似たようなものである。

が、全員が武道、剣道や杖道、居合道経験者のため 竹刀か杖、木刀か軍刀に偏っている。

実は術師が集まって構成される「班」はこういう風に類似の「愛機^{あいき}」を使うメンバーがそろつ傾向にある。相性がいいのもあるし、消耗

した時に融通が利くからである。

そう言う訳で楓は深雪にいつも彼女が使っている刀、軍刀を薦めたのだが…

「あー…、すみません、杖とかは無いでしょうか？」

今の斉藤深雪の中身、「平成の」斉藤深雪は普通の女子大生である。なるほど剣道もしていたしそこそこの腕前であった。

が、殺傷能力のある刀は（たとえ刃引きされていても）苦手意識とどうか、どうにも使う気にはなれない。と、言うか怖い。

ゆえに「魔術師」杖」という安易なイメージで杖を所望したのである。

木刀という手もあったが、「魔術って言ったら杖でしょ！」と杖を選んだのである。

安易な御仁である。

これが後にとてつもない成績をもたらす事を本人はもちろん周囲も知らない。

楓は怪訝な顔をしたが、記憶喪失の影響かと考え、特には考えず、「あるぞ。桜、お前の貸してやって」

「りょーかい」

朝から見ているがこの班内は実にフレンドリーというか上下関係に厳しくない。

軍隊というともっと厳しい所じゃないかと不安だった深雪としては先ずは一安心と言ったところか。無論ある程度と言うものは存在しているが。

ただし朝食の間中「記憶を取り戻すきっかけになるかもしれん」という楓のアバウトな思いつきから班員全員から実にフレンドリーに弄り倒されたのだが。主に素行で。

「昭和の私、何してんの？」と思うエピソードばかりであったのは言うまでもない。

斉藤深雪という名前の人物は昭和にいたのも平成にいたのも似たような性格で瓜二つらしい。

昭和の斉藤深雪がどうなったのか気にはなるが、この調子だとそちらも案外平成になじんでいるかも知れない。

そして

エスカレーターするフレンドリー恐るべし。ちょうど近くに来ていたので買い込んだという、間宮羊羹を口に中にこれでもかとぐいぐいぐいぐい（以下省略）押し込まれて危うく再度昏睡しかけた。

首謀者^{はんちよう}曰く、「いや、もう一回寝たら記憶戻るかも知れないと思っ

てな？」

*間宮 海軍の給糧艦。ようは食料生産、加工をする。本艦の作る羊羹はかの虎屋にも匹敵すると言われる名物であった。

騒ぎに気がついた班長のさらに階級上の人が止めに入ってなければ深雪の命は危なかったかも知れない。

なんだけれども連帯責任と言って全員で後片づけとかやらされる事になったのは納得できない。

あの人、助けてはくれたけど、赦してはくれなかったとは深雪の談。

そんなフレンドリーな高須賀桜女史愛用の杖を受け取る。
杖と言ってもファンタジーなものではなく、細長い丸棒と言った感じが強い。

持ってみると実にしっくり来る。
あるべきものが戻ったというか、これなら「魔術」も使えど、何故か納得してしまった。

事実、この時深雪は完全に魔術を行使できるようになっていた。
しかもかなりの威力で。

すぐ側にいた楓、桜はそれを感じ取り、少し驚いた。

もう思い出したのか、と。

だが、その驚きはすぐに塗り替えられる。

「あれを斬れば良いんですね？」うって変わって落ち着いた深雪の声

「あ、ああ。ただ400メートルだからな。最初は届かないと思うぞ。」

彼女の変化に少し驚きながらも楓は言う。

だが。

「いえ、十分斬れます」何故か自信に溢れた深雪の声
「ほほう。面白い。ならばやって見る」

「了解!!」

不適な笑みを漏らしつつ楓は桜と共に離れる。

「準備良し!!」

観測席に着いている恵理が合図を出す。

「よし、では「斬撃」始め!!」楓の号令の直後

未来の恩恵（前書き）

完全にご都合主義というか、主人公がチートです…

未来の恩恵

「「「「「お？」「」「」」」」

あまりの光に八田班の面々は変な声を出す。

それはそうだろう、通常ここまで光は出ない。
となると考えられるのは二つ

？光の方に無駄に力が入ってしまった。

これは時々ある事である。とは言ってもここまでの光は珍しいが。
深雪の場合、もともと優秀だったのが記憶喪失でそこら辺の制御が
甘くなったのかも知れない。

これが普通に考えられる原因である。

もう一つあるにはあるのだが…

？とてつもない威力

……論外、考える必要もないに等しい

これほどの光を放ってかつ打撃、威力の方にも同じだけ破壊をもたら
せる術師が存在するか。

答えは「あり得ない」である。

斬撃は威力は絶大で厚さ20？の装甲版でもアッサリ両断する。

唯一の弱点が射程でよくて350メートルというのが常識なのだから。

これが術師が初めて実戦投入された日露戦争以来、術師が最前線に向かない理由の一つである。後に「防壁」の術式が機関銃、砲爆撃に絶えられる強度になるまで、斬撃は単なる無謀な斬り込みに過ぎなかった。

現在の日中戦争では別の理由で最前線に向かないのだが、ともあれ射程の短さは術師全員に共通する弱点なのである。

だがしかし、考えて頂きたい。

魔術とは「イメージ」に大きく左右される。
言ってみれば「ここまでしかできない」と刷り込まれてしまうと意外なほどにその限界で止まってしまう。

ところがである。

斉藤深雪 18歳

彼女は平成の人間で当然の如く「ゲーム」と言うものにも親しんでいた。

彼女の中では「魔術」無限の可能性に等しい。
なまじ『術師協会』での養成、教育を受けてないがために刷り込みの弊害もない。

何が言いたいかというと

いま現在

齊藤深雪の魔術には刷り込みによる限界が設定されていない。
本当に「全力」を出し切る事が出来る。

その結果。

その場にいた全員が驚愕する結果をもたらす。

60

すなわち

練兵場が深雪を中心として向こう側が綺麗サッパリ消滅した。

海を背にする立地だったから海岸線書き換えて済んだものの、市街地だったら何が起こっていたか……想像するだに恐ろしい！

当のご本人（下手人）は

「え？嘘？え、え、えええええ！！！！？？？？」

絶賛大パニックなう。

誰よりも一番混乱している。彼女としては班長に「やってみろ」と本当に「良い笑顔」で言われたので、アクションゲーム？とかで見た「周囲の敵を薙ぎ払う」というイメージを遂行しただけなのだ。

ただ、加減とかくわえず（というか加減なんてもの、18年間した事は一度もない。弟への教育的指導が良い例である。）文字通りの「全力」でやったがためにこれほどの事態になってしまったのである。

無論そんな事本人にも周囲にも分かるはずもなく。

「お、お、落ちて私！！そうだ深呼吸深呼吸……」

そういつてするのはお約束通り、**ラマーズ法**である。

彼女は期待を裏切らない。実に素晴らしい。

が、深雪嬢のけなげな努力は

「斉藤おおお！……！」
かえで
男らしい班長殿によつて粉碎される。

「ひいつ!!!」

あまりの迫力に深雪は冗談抜きで呼吸が止まった。ついでに震えだす。

今までの経験から言って

「やらかした」

「教育的指導」

「殺サレルッ」

という警報が彼女の脳内でこれでもかと鳴り響く。

『エマーージェンシー、エマーージェンシー。緊急レベル5、最大。

母ちゃんの折檻が来ます10秒前！！総員、対ショック、対閃光防御！！』

彼女の育った環境がこういうものなのか小一時間間いつめたいのは筆者だけではあるまい。

特に3つ目。と警報の中身、ヤ。トか、ヤマ。なのか深雪？お前は昭和なのか。

生命の危機せつかに震える深雪だが。

「一体全体どうやったらこうなるんだ！？」

班長の言葉は厳しいながらもお説教というより質問であった。

とりあえず即折檻しよけいと言う訳ではないらしい。

「言われたとおり、標的を全力で薙ぎ払ったらこうなりました…」

正直が一番です。神様は言いました。嘘は良くない事だと。

沈黙

只ひたすらに沈黙

「本当なのか？」

疑り深い班長である。深雪は若干不満だったがこれだけの事をしでかしたのだから仕方がない事かも知れない。

「はい」

正直に返答する。

「…料理だけに飽きたらず、お前は本気でハルマゲドンを起こす気なんだなよく分かった」

「え、ちょ。いや、え、え？」

深いため息と共に班長が漏らしたおつとろしい反応。

深雪としてはそんなつもり毛頭無いのだが、他の班員、周囲の軍人としてはマジな感想である。

そりゃそうだ、常識『射程350メートル』を軽々越えているのだから。

その後も色々質問…途中からは基地の人も交えた尋問になっていたが、本当に種も仕掛けもない（本人にとっては）ので答えようがない。

「まあ取りあえず、だ……この惨状をどうするつもりだね斉藤少尉？」

楓が堂々巡りの様相を呈してきた現状を切り上げにかかる。

もつとも深雪本人にとっては、目をそらしてきた現実に行き渡るだけだったが。

「あ、う……と、取りあえず元通りに出来ないかやってみます。」

「「「「出来るの!？」」「」」」」

「えと、試すだけですけど……やってみます。」

彼女が試みたのはゲームとかで見られる

「どこからともなく光が降り注ぎ、それが晴れると元通り」
ってやつである。

結論から言つと

日本魔術師に残る偉業

ブルドーザー
「土木工事術式」

がこの日発動された。

「…何というか…君は規格外になってしまったんだな少尉…」
班長が呆れた顔で言う。

深雪がしでかしたのは

？大量の土砂を出現させる
これ自体は他の術師でも出来る。量がかなり凄かったが。

問題はここではない。

？土砂を見えないブルドーザーで押し出す
これが今回やらかした事である。

昭和16年当時日本にブルドーザーなんてものはないと言ってよい。
試作とか少数はある。が、軍用で、資源も乏しく、そう言ったノ
ウハウにも乏しい日本には贅沢な装備であつた。

現状、海軍の場合、飛行場設営にしてもツルハシともつて文字通り
「人海戦術」でエッチラオッチラ作るのである。

対して米国は戦場にもブルドーザーをどんどん投入した。

太平洋の戦いにおいて、日本が占領地で苦勞して一ヶ月は軽く要して中規模の飛行場を作ったのに対し。

米軍はそれらを砲爆撃で「地図から消して」文字通り海兵隊で「埋め尽くし」占領してからブルドーザーを始め機械化された設営部隊でもって「短期間で」「超巨大な」飛行場を作るのが常であった。

良い例がサイパン島のアスリート飛行場である。

日本軍が作ったものを文字通り「消して」、超長距離巨大爆撃機B29の巨大な巢にしてしまったのである。日米の同じ場所の飛行場とは思えないほどの隔絶がここにはある。ついでに原子爆弾を一時的に格納していた跡が現在でも残っている。

そんな訳でイメージしようにも見た事が無いので日本の術師は「ブルドーザーをイメージ」出来ない。術式に組む事も出来なければ行使する事も出来ない。

と、いう常識を齊藤深雪^{みらいじん}はぶち壊す。

彼女はこの時代にはないものをイメージできるし、術式に組み込んで行使できる。

そんな訳でいろいろ実施した結果。

斉藤深雪の異常な技量^{チートになった}向上が判明した。

これを受け、八田楓は彼女をそのまま海軍呉鎮守府所属 八田特務班におく事とした。

それらの技能は今後の戦闘の中で明らかとなるであろう。

理由は彼女の技能を買った事もあるが、何より

もはや人員の入れ替えなんてしている暇はなかった。

時、1941年7月22日

彼女たちの乗る艦^{フネ}が間もなく竣工する。

それはとりもなおさず彼女たちの“太平洋戦争”が迫っている事を示していた。

未来の恩恵（後書き）

次はフネに乗り込みます。

「瑞鶴」(前書き)

ようやく開戦前夜が終わりそうです。
…いや待て…まだ続くかも…

「瑞鶴」

1941年 9月25日

八田楓以下、海軍「特務八田班」は本日竣工したばかりの軍艦に乗り込んだ。

海軍 呉鎮守府所属 第1航空艦隊第5航空戦隊 航母「瑞鶴」

彼女たちの出向先にして日本海軍の最新鋭航母である。

現在、神戸から呉に向かっているこの大型航母のスペックは

全長257・5メートル

基準排水量25・675トン

飛行甲板は長さ242・2メートル、幅29・5メートル。

機関出力16万馬力、最高速力34・2ノット。

航空機 常用72機 補用12機 計84機搭載。

赤城、加賀という巡洋戦艦、戦艦改造の超大型航母に匹敵する飛行甲板と、蒼龍、飛龍という中型航母に勝るとも劣らない航海性能を誇るこの瑞鶴ならびに同型艦翔鶴こそ、それら航母4隻でえた成功や失敗、ノウハウを結集し、完成された艦隊型大型航母なのである。

ちなみに航母とは日本海軍における「航空母艦」の正式な略称である。

どういつ訳か戦後は空母で統一されているし、そっちの方がしっくり来る。

何故であろう？

答えを誰かが見付ける事を期待……見付けても意味無いかと思い直

す深雪である。

「本当は来年竣工の筈だったんだがね。」

「そうなんですか？」

楓の発言に深雪は驚く。

ちなみに深雪、ゲームで太平洋戦争をやった事があるのである程度の事ならば分かる。

が、この情報は初耳であつた。他の班員も同様であつたらしく班長の方に耳を傾けている。

「ああ、何でも海軍さんが川崎重工にかなり無理を言つたらしい」
海軍の軍装で楓が言う。

事情を知らぬものならば「いやいやアンタの所ですからね!!??」
と突っ込むところだろうが、それなりの理由がある。

八田班は『大日本術師協会』から海軍に「出向」の形を取っている。
無論出向と言っても長期的なものだから、徐々に海軍軍人らしくはなる。

が、現状彼女たちは着任したばかり。

海軍軍装に初めて袖を通したのが4月。

「術師協会」は徒弟制でその辺りの礼儀とかはしっかり仕込まれているので敬礼の仕草が若干ぎこちない他は他の海軍軍人と違いはそうそう見付けられない——女性である時点で間違いなく分かるのだがそこはスルーする。——のだが、考えとか思考はまだどうしても

「術師」ではあっても「海軍軍人」ではない。

良くも悪くも彼女たちの中では――自覚はないかも知れないが――海軍はまだまだ「出先」であり、「本拠」ではないのである。

それ故の楓の発言となる。

無論海軍軍人がいるところでは口に出す事はしない。

ちなみに川崎重工はこの後大型重装甲航母「大鳳」でも海軍の要望に応え無茶をする。

具体的には甲板取りつけに際し、作業がどうしてもその角度じゃないと出来ないと言うので従業員を逆さに下ろし、その体勢で逆さづり溶接とかリベットをやった。それに応えた職人魂恐るべし。

その造船魂が戦後復興を支えたといって過言では無かろう

閑話休題

ここは八田班に宛われた大部屋。

もちろん船室なので陸の上よりは狭いが、本来の使用人数より少ない女性陣占有空間なので息苦しさはない。

八田班は組織的には「艦長付」となる。

第5航空戦隊司令部が乗り込んできたら司令部付になる予定ではあるが、いずれにせよ特殊な配置である事に変わりはない。

これも「出向」してきた「術師」でしかも女性である事が考慮された結果らしかった。
男性の術師も協会にはいるのだが……

昭和13年

海軍は『大日本術師協会』に術師派遣依頼を出す。
内容は「昭和16年に以下の技能を持つ班を派遣して欲しい」と言うもの。

この要請は陸海軍が毎年2年後ないし3年後を見越して出す事が不文律となっている。

もともと、術師は量産できないので期限までに要請が応えられるかは不透明という欠点がある。

それでも術師の供給は陸海軍にとって魅力的であり、術師協会も陸海軍の援助を恃んでいるので全力でそれに応えるべく努力する。

ちなみに陸海軍の犬猿の仲は周知の事実であり、術師協会も出向先が偏らないようにうまく差配するのに気をもんでいたりする。

- - - - -

要請書

宛 大日本術師協会

現下の情勢に鑑み、海軍省は貴会に以下の要件を満たす術師集団の派遣、出向を要請する。

一つ、50番(500?) 航空爆弾に対抗しうる強度を持つ「防壁」を展開できる事

二つ、航母からの艦載機発進に際し「軽減」による補助をなし得る事

三つ、他の軍出向術師と同様に『治癒』『念話』が出来る事 無論それ以上の術式行使が出来れば望ましい。

四つ、可能であれば六名以上出向頂きたい

期日は昭和16年春。なお、派遣困難な場合など……………

- - - - -

大日本術師協会はこの要請を受け検討会を開いた。

条件の?はそもそも術師協会では6〜7名を一班として送り出しているので「一応」つけられたものに過ぎないであろう。

?についても中国大陸で補給部隊や重砲部隊に実施している例があるので問題ない。

?は初歩中の初歩である。これもノープロブレム。

問題は条件の?である。

中国戦線において25番(250?)の航空爆弾を跳ね返してはい

る。
しかしいきなり50番(500?)とは。

かなり無謀ではないかとの意見が相次いだ。

しかし「跳ね返す」のではなく「逸らす」すなわち「受け流す」のは明治以来上手く行く事が判明している。

これは「受け流し」のイメージを武道などで持ち合わせた日本魔術師の優位によるものであった。当然、他国にも同レベルの防壁が存在する可能性はあるが。

陸戦においては「逸らす」と味方側、友軍に砲弾が行ってしまい、被害をもたらす危険性があるので行われていなかったのだが、海戦では逸らして海に落ちれば大丈夫だというので取り入れられていた。そしてかの「日本海海戦」で、丁字戦法で変針する際、此方は敵の射程内で撃ち返す事が出来ない、打たれっぱなしになると言う弱点を守るために『受け流し防壁』が実行された。そして術師が乗り込んだ旗艦「三笠」に一発の命中弾も与えなかったのである。

日本術師協会は「日本海海戦の大勝利に我々の『防壁術式』が大いに影響を与えた！」と喧伝したが、戦後の調査で、そもそも遠洋航海で疲れ果てていたバルチック艦隊の発射した砲弾はほとんど命中する弾道になかった、防壁は中盤まで要らなかったとの意見が出されてしまった。

術師協会は反発したが、データなどが見事に示していたため、認めざるを得なかった。

ただ、中盤以降、彼我の距離が詰まり、水平射撃になってからもついに最後まで「三笠」に一発しか命中弾を与えなかったのは間違い

なく術師の『受け流し防壁』の成果であると広く認められた。（*筆者注、実史において三笠は複数の命中弾を受け中破という損害を被った）

ただし、欠点も判明している。

『受け流し防壁』および『防壁』は見方からの攻撃も通さないのである。

なので此方が撃つタイミングで一々術式を解除する必要があった。陸戦、特に彼我入り乱れる野戦、要塞突撃に術師が向かないのはこのためであり、「三笠」の唯一の被弾もこの一瞬にも飛び込んだ強運のロシア戦艦からの砲弾によるものであった。

ともあれ術師協会は航空爆弾に対し『受け流し防壁』が有効かどうかの実験を行った。

日本海海戦の時は海面に垂直に「立て」ていたが、航空爆弾は横からでなく上から降ってくる。中国戦線では塹壕の上に「蓋」をする要領で「跳ね返す」術式を行使した。

が、海軍の要請だと今回は「支点の無い空中に『受け流し防壁』を展開する」必要がある。

試行錯誤の末、『浮遊』の術式のイメージと組み合わせる事で可能である事が判明した。

さらに実験を繰り返した結果、『受け流し防壁』によって急降下爆撃ならば80番（800？）も受け流せる事が実証された。

同じ重さの爆弾の場合、水平爆撃と急降下爆撃では位置エネルギーの関係で前者の方が貫通力が高い。ただし命中率では格段に劣る。急降下爆撃が命中率向上のために開発された事実がそれを証明している。

水平爆撃の80番（800？）はそもそもの命中率が低いし、急降下爆撃の80番（800？）は受け流す事が出来る。

すなわち海軍の要請レベルをクリアする事は「その実験を行ったベテラン術師ならば」可能だと判明した。

課題は現在要請中で昭和16年を目処に海軍に送り出す訓練術師にその技量があるか。

かくて翌日から訓練術師に——いわずもがな後の「八田班」を構成するメンバー——これをマスターするための地獄の特訓が追加される事になる。

その地獄ぶりたるや、初めの頃など訓練終了時には

「返事がない、ただの屍のようだ」

と教官術師をして言わしめる程であつたという。
ちなみに八田班ではこの地獄の特訓を監督したかの教官術師の事を
「地獄から来た悪魔」とか「人の心を持たない鬼ババア」と呼び、
いつの日か復讐することを誓っている。

冗談ではなく半分本気であると言うから恐ろしい。

術師同士の果たし合いは今の所発生していないが、もし起こったら
激甚災害をもたらすのは明白である。お願いだから自重して欲しい。

ともあれ海軍の要請に応える事は可能と判断した術師協会は海軍に
その旨返答を出し、訓練術師に地獄の特訓を追加した。

なので楓達が本来復讐すべき相手は術師協会と言う事になるのだが…

かくて昭和16年をもって八田班は海軍に出向し、京都から一番近
い所で艤装中であつた航母「瑞鶴」所属となり、艤装委員長（のち
の艦長）直属となつた。

これは航母に術師が派遣された初の事例であつた。

他に海軍に出向している2班は戦艦「長門」「陸奥」に乗り込んで
おり、敵の中小艦艇からの砲弾や航空爆弾の『受け流し』、戦闘で

発生する負傷兵の『治癒』を任務としている。

楓や深雪のようなひよっこではない、ベテランの彼らにとって『受け流し防壁』は協会からの簡単なアドバイスさえあれば、海軍と一緒に訓練する中で半年もあればマスターできる代物らしい。

これを聞いた楓達が涙したのは言うまでもない。彼女たちはまるまる1年かかったのだ。

さすがに戦艦の主砲は日露戦争時に比べて大型化、高威力化して受け流し困難だが、そちらは海軍伝統の「艦隊決戦」の領分なので問題ない。

海軍軍人に言わせれば「そこまで術師に取られちゃ俺たちは失業してしまふ」である。

新鋭艦に配属されたのは「航母で術師がどれだけ役立つかわく分らん。となると、ベテラン艦に載せる訳にも行かん。新鋭艦でテストしよう。」との事情である。

ついでに出向されて来たのが女性だったのも影響したらしい。

出向できる男性術師がいなかったため、海軍もやむ無しと了承はしたが…

術師とは言え女性であり、古いフネほどその辺りの差別意識は厳しいものがあつたのである。

「女に軍艦勤務がつとまる訳がない」という風聞も聞こえてきた。

これを聞いた深雪などは憤慨したが、楓班長は

「まあ仕方あるまい。実戦で見返してやれば良い。目にもの見せてくれよう」

と実に男らしい感慨を述べるにとどまった。

翌9月26日

瑞鶴は母港となる呉に入港。

そこで簡単なチェックや訓練の後

10月7日

大分沖に向け呉を出向

大分沖で翔鶴ののち猛訓練に入る。
なぜなら

12月には世紀の大作戦に参加せねばならなかったためである。

第5航空戦隊（前書き）

ようやく単冠湾に行けます。

第5航空戦隊

11月14日

本日は瑞鶴に第5航空戦隊司令官 原忠一少将が着任する日である。

なので深雪達特務「八田班」も飛行甲板で待機しているのだが。

「…まだですかねえ…」

「こら、口を慎め山崎。」

呉で彼女たちはかれこれ1時間近く待機していた。

広島とは言え11月は肌寒い。そんななかで長時間の待機はこたえるものがある。

「あ、来られたようですよ」

恵理が示した方を見れば、なるほど内火艇が波を蹴立ててやってくる。

ところでこの内火艇、海軍7不思議の1つにも数えられることがある。

異常なまでに古いままなのである。

なんと大正2年に英国、ビッカース社に発注した巡洋戦艦金剛に積まれていたのをそっくりコピーしたのを一切の改良もないまま終戦まで使い続けたのである。

昭和になると漁船にも横揺れ防止の「ビルジキール」が標準装備されていたにもかかわらず、内火艇にはそれがなかった。規格も古いままだったので発注を受けた所は小さな造船所でさえ皆疑問を持つたけれど、遂に終戦まで一切の改良は許されなかった。

理由は「海軍軍人たるもの、揺れくらい我慢しろ」「少しでも改良を認めると次々と改良点が出て、結果それを載せる艦艇の設計にも影響を与えかねない」との事であったが、それにしても戦後海軍ファンはこの奇妙な頑固さに首を傾げたものである。

とまれ原長官を載せた内火艇が瑞鶴に接舷。

長官は舷梯を登り、瑞鶴艦橋へと向かう。暫く経って瑞鶴艦橋に将旗が翻った。

ここに第1航空戦隊第5航空戦隊が本格始動する。

艦長始め艦要員との顔合わせやら打ち合わせの後、八田班が呼ばれる。

この順番も男尊女卑の現れではないかと深雪などは疑ったりもしたが、楓曰く

「私たちは“特殊”だからな。佐藤さんや山口さんも顔合わせはラストだったそうだ」

佐藤、山口とは長門、陸奥に出向している「佐藤班」、「山口班」の事である。男性術師で構成されている彼らとて特殊、言い方を変えれば“異端”ゆえに結構苦労している部分がある。

実戦では一番頼りにされると言っただけだが、式典とか、そういう場ではどうしても正式の“まともな”正規乗員を優先せざるを得ないためである。

11月14日 1600

「長官、特務班が来られました。」

「うん、入れ！」

従兵に取り次いで深雪達は長官室に入る。

一通りの事務報告の後、親睦を兼ねた雑談となる。

他の要員とのそれに比べ、時間が延びているのは仕方あるまい。

「術師」は非常に珍しいため、どうしても話の興味が尽きない。どうしても長くなるのである。

佐藤班、田中班との会合が最後になるのもこれが原因であったりする。

しかも今回は

（長官と副官数人の他は全員女性……そら長話にもなるわな。）

深雪の想像通りである。

原長官に下心は微塵もない。長官の名誉のため天地神明に誓っている。

本当にこれっぽっちもないのである……ここ重要。

が、そうはいつでもそこは男の性質。

妙齢の見目麗しい女性とお喋りというのはやはり嬉しい、楽しい。男社会の軍隊ならより一層の事であろう。

ただそうやって雑談する事で良好な関係が築けるならば喜ばしい。

分かった事はこの原長官、楓達とかなり馬が合う。

…両者の中身が似ているからじゃないかと深雪は見ているが、本人に言つと殺されるので黙っている。

が、深雪が何もせずとも楓による諸々の災難が彼女に降りかかるのは確定事項と言つて良い。

楓の部下である限り恐らくずっとこのうたであるうと、班員は思っているが誰も教えてはあげない。

見ていて面白いから。

薄情な奴らである。

楓達と長官の会話は弾む弾む。

着任初日で引継がメインと言う事もあり、今や雑談と言ってもよい内容になっていた。

どんな内容かというと

「…な事がありましたね」

「はっはっは。では斉藤中尉を厨房に入れてはならんと言う事だな。

良し分かった。関係部署によく言っておこう」

「『『『宜しく願います!!』』』」

「班長！？みんな!？」

言わずと知れた深雪のこれまでの所業である。

八田班にとってこれほど良い話のネタはない。というのは常識である。

そこに本人の意思は介在せず、問答無用で話のネタにされる。

班員が本当に深々と頭を下げて長官にお願いしたのはそれなりの武勇伝があるためである。

具体的に幾つか挙げると。

調理は毒ガス製造になりかねないので食器洗いをさせたのだが。

…すねた深雪が試しに『時限発動魔術』の訓練をしたところ。なぜか術師の時限設定限界を越えても作動せず、失敗したのかな？と彼女が出ていった後、

食器がダンスをしながら食堂を蹂躪した。

と言ったものや

罰として掃除をさせたところ、面倒だなあ、箒とか雑巾が勝手にやってくれんかなあと思っていたら本当にそうなった、とか。

後者は成功例として大いに喜ばれた。

ただ、本人に掃除スキルがないため、この新発明『自動掃除術式』もあまり上手とは言えない。

コツとかイメージを教えて貰った恵理とか他の班員が今でははるかに『自動掃除術式』を使いこなしている。

まだ新鋭艦なので乗員にもよく分からないところがあり、少しでも負担軽減になる事はとても喜ばしい事なので乗員からは大いに喜ばれたとか。

ついでに酒保（ちょっとした売店のような所。ただし席はないので自分たちの船室に持ち帰って食べたり、吸ったり、飲んだりする）よりも美味しい羊羹とかを作ったりしたために今や瑞鶴艦内では彼女たちの人気は艦長をも凌ぐほどだったりする。

むろんそれは平の水兵に関してであつて、士官達からはそれほど良く思われていない。

まあ羊羹は大好評だったので甘い物好きな士官からはそこその支持を獲得したが。

原因は彼女たちの階級にある。

深雪、桜、夏、冬と言つた平班員でも「中尉」

副班長の恵理は「大尉」

班長の楓に至つては「少佐」である。出向して初っぱなからこれなので一般の士官からしてみれば優遇、依怙贔屓である。

これは術師がその技能から「パシリ」として使われた明治の苦い「戦訓」を受けて協会が陸海軍に要請したもので、女性術師が実戦投入されている今日では、彼女たちの身の安全確保にも一役買っている。

そう言う理由があるのだが、やはり普通の士官からすれば不平等である。

自分たちは血のにじむような努力の末に海軍兵学校に入つて（倍率20倍はかたい）、身を粉にして厳しい学術、実技を経て卒業し、月月火水木金金と言われる日々の苦しい訓練をして、ようやく今の階級を得たのに、「術師協会」といったか、そう言うところを出た20前後の小娘がそんな階級にいるのはどうにも納得のいかないところなのである。

ともあれ、以上二つはここ数日間の出来事であり、「平成の」深雪がしでかした事である。

なまじアニメやゲームで無限の可能性を持つ魔術をイメージしやすかったためであろう。

役立つ技能も凄まじいレベルに到達しているが、役立たない技能も無駄に向上しているとは他の班員達の言である。

「まあ、必要な技術も向上しているので問題はないのですが…
くれぐれも食堂関係には近づけないよう、お願いいたします」

「分かった。本官の身の安全のためにも必ずそうしよう」

「…長官まで…私をなんだと思ってるんですか？」

「ん？重要要注意人物だが？」

「そんな！酷いです長官！！」

「いや、反論の余地はあるまい」楓が追撃する

「もう臨死体験はこりごりですね」恵理も続く

「深雪、これもこの艦の安全と私たちの安寧のために必要な連絡事項ですよ」冬が言う。

「必要事項なんですかつ！！??？」

「『『『『当然』』』』」
「長官まで！！??」

自業自得であろう。

長官を載せた瑞鶴は再度大分沖で訓練に入る。
数日間の訓練の後、艦長、長官からの通達がなされる。

「これより本艦は東北沖での演習に向け出航する」

1941年 11月18日

乗員にも“本当の”行き先を告げず瑞鶴は出航する。

秘匿された行き先は

択捉島単冠湾。

真珠湾攻撃に向けた第一航空艦隊の集結地であった。

択捉島

「さ、寒い!!」

「どうした皆? 部屋からでないと仕事もできんだろ?」

「班長はどうして平気な顔をしてるんですか?!?」

「副班長までどうした? これくらい普通だろう?」

「……いやいやいや」

班員が外套も無し、普通に軍の作業服（しかも本来南方で着用する半袖）で船室の扉を開けて仁王立ちする班長につっこむ。

「とりあえず、扉閉めてもらえないでしょうか…」

「却下だ桜。さっさと仕事するぞ。」

そう言つて楓班長はくじょうものは舷窓まで開け放つ。

そこから入ってくるのは身を切り裂かんばかりの寒風。
寒いなんてモンじゃなく

「痛い!!!!!!」レベルである。

「ん? 冬は名前に似合わず寒がりだな。乾布摩擦ゴシゴシでもするか? それとも寒中水泳ダイブ?」

「どっちも嫌ですつ!!」

舷窓から見えるのは雪を頂いた山々。

周囲には航母や戦艦、大小の艦艇が見えている。

ここは択捉島単冠湾。

世紀の大作戦に向け、三々五々、続々と艦艇がここに集結していた。

バラバラなのは作戦を秘匿するためと、航母「加賀」については新兵器を積んでくるためである。

瀬戸内海や日本近海では今この時間も偽の航母部隊が盛んに偽電波を出して、あたかも艦隊は日本にいますと思わせる行動を行っている。

が、海軍軍人と異なり、京都で鍛えているとは言え、八田班は機能不全に陥りかけていた。

京都の冬は確かに寒い。盆地である事にくわえ、地下にかたい岩盤があるので盆地全体がいわゆる「コンクリート打ちっ放しの床」に近いためである。

が、

択捉の寒さは

そんなもの可愛いものだと言えるレベルであった。

何せ夜間に物を干していれば凍り付く事がある。

もうすぐ12月。

これからもつと寒くなるところだと言われて班員が震え上がったのはいうまでもない。

楓班長だけは普通に軍装か作業着で平気な顔をしているが。

班員は自分たちの長が人外なのではと失礼な想像をしていたのは秘密である。

ともあれ、数時間後

第1航空戦隊旗艦「赤城」から帰ってきた原長官始め第5航空戦隊司令部に呼び出された八田班の面々は。

「…八田班長…君の所の班員は大丈夫かね？」

「申し訳ありません。如何せん術師というのは精神面に重きを置いて訓練されるため、どうも寒さに弱いようで……術の行使は万全でありますのでご容赦頂きたい。本当に申し訳ないがどうかご容赦の程……」

「いや、まあ 術の行使がシッカリできるんなら良いんだがね」

長官が苦笑するのも無理はない。

彼女たちの顔はマフラーで半ばまで隠れており、長官の前なので外に出てきた顔は寒さで白くなっていた。

原長官始め要員全員が、可愛えええ！！^{キユン} となつたのは言つまでもない。

もちろん着膨れでモコモコしている。
愛らしいくらいにモコモコしている。

この後の作戦中、この愛らしい彼女たちの姿を見て、乗員からの支持が今度は士官含め全体で不動の物となつたのは言つまでもない。
モコモコ恐るべし。

ちなみにその場にいる長官・参謀始め皆、深雪達には遠く及ばないものの防寒着をしっかりと着用している。

只一人普段通り、しかも半袖なのが楓であつた。

長官始め全員が彼女は人外なのではないかと班員と全く同じ感慨を持ったのは秘密である

「では、八田班、呼び出しにより出頭いたしました。ご指示を願います」

「ウム、君、部屋の鍵を閉めろ」
長官が命令し、一気にその部屋の空気が緊張する。

「さて、君たちを呼んだのは他でもない。」
原長官が今までひた隠しにされてきた極秘作戦を彼女たちに伝達する。

もつとも深雪^{みらいじん}はほぼ正確に何を言われるのか予想していたが。

「真珠湾攻撃」

世界の軍事史に残る偉業にして太平洋戦争の勃発の項では間違いなく取り上げられる作戦である。

実はこの作戦、完全なる日本軍オリジナルではない。

第二次大戦以前から「航空機でもって敵軍港を破壊する」という研究を英国でしていた男がいた。

その名はリスター大佐。

開戦後少将に昇進し地中海で空母戦隊の指揮を執る事となった彼はさっそくイタリア海軍の根拠地であるタラント軍港を空母の艦載機で攻撃、イタリア戦艦軍に打撃を与えようという「ジャッジメント作戦」を立案する。

1940年秋当時イタリア艦隊はタラント軍港に引きこもったままであった。

これは日露戦争時の旅順艦隊とよく似ている。

この時、日本海軍は閉塞船を沈めて出てこられないようにしようと企画した。

しかしこの作戦は軍神広瀬をはじめとする多大なる犠牲を払ったのみで失敗した。

同様の作戦は米西戦争で取られた事もあったが此方も失敗した。

何が言いたいかというと、軍港に閉じこもった艦隊ほど厄介な物はないのである。

なのでリスター少将の作戦は直ちに実行に移される事となった。ところが、作戦参加予定だった空母「イーグル」「イラストリアス」に事故が相次いだ。

結局「イーグル」艦載機を合流させた上で「イラストリアス」のみで作戦を行う事となった。このため作戦は当初より一月近く遅れて11月11日に英国地中海艦隊司令カニンガム大将によって発令された。

攻撃は僅か21機のソードフィッシュ雷撃機によるものだったが、在泊していたイタリア戦艦3隻を着底（水深が浅かったので沈みきれず、海底に艦底が着いた）させる大戦果を挙げる。被害はソードフィッシュ2機のみ。

これは軍港で航空魚雷が使用できる事を示した世界初の快挙である。

3隻の内2隻は翌年までに復帰したものの、残る1隻は遂に修復できずに終戦を迎える。

さらにイタリア海軍はナポリに文字通り「引っ込んだ」ので英国の

輸送船団の地中海運航が容易となり、さらには海軍戦力を大西洋に回せるようになった。

この内容に各国は非常なる興味、関心を示した。

軍港で航空魚雷が使えるというのは一種衝撃的事実であり、今までと比較的安全と思われていた軍港までも戦場になった事を示すものであった。

実は米国もこの結果を調べていた。

実施したのが味方、英国だったのもあり海軍情報局はこの作戦に関する情報収集、さらには分析を行い、米国太平洋艦隊司令部にも送っていた事が分かっている。

しかし何故かこの情報は注目されず、港内の魚雷防御も特に見直されずに太平洋艦隊はハワイに碇を下ろしていたのである。

日本海軍の独自性は

前代未聞の「正規航母6隻を集中投入した事」にある。

当時空母は1〜2隻で分散して運用されるのが常で——英国は終戦までそうであった——これほどの空母をまとめて機動部隊を編成したのは日本海軍が世界で始めてであり、それこそが日本の「真珠湾攻撃」の特徴であり、成功をもたらした要因であった。

原長官から攻撃計画を聞かされて深雪を除く班員は驚愕した。深雪も怪しまれるとマズいので驚いたふりをしていた。

「しかし航母を集中運用すると、敵の攻撃にあった際、一度に6隻の航母が被害を被る危険があるのではなかったでしょうか？」
楓の質問は当時の世界の常識であり、空母の集中運用がなされてこなかった理由であつた。

ちなみに海軍への出向に際し、彼女たちは海軍の知識も大分たたき込まれている。

空母は少ない被弾でも発着能力を喪失し、存在意義を失う「弱い」艦種と見られていた。

さらに航空機用ガソリン等を積む関係で非常に燃えやすい。

タラント空襲に際しても航空燃料関係でのアクシデントが「イーグル」不参加の理由であつた。

それゆえ敵に見つかり、攻撃を受け多場合でも被害が分散するように空母を分散運用するのがこの時代の常識であり、ゆえに艦載機も少数で打撃力は小さく、

「空母に戦艦は沈められない」。

空母が海戦の主力たりえないとされ、戦艦重視が続いていたのである。

タラントの場合は停泊していた上に水密扉が開いていたからだとされていた。戦闘中の戦艦に対抗できるのは戦艦だけだと、そう目さ

れていたのである。

集中運用はその打撃力の大幅向上に繋がるメリットを持っていた。

しかし、そうは言っても先に述べた危険性は残る。

その危険性が現実のものとなったのが実史におけるミッドウェー海戦である事は言つまでもない。

長官は得たりとばかり笑う。

実際その質問を待っていたのだ。

ゆえに彼は答える。

「八田班長の言うとおり。

そこで君たち特務班が呼ばれたのだよ。」

11月26日

世界の海軍の常識を変える大艦隊が単冠湾を出撃した。

針路は、東

目標、ハワイオアフ島 真珠湾

択捉島（後書き）

ようやく開戦できそうです。
ちよっと続きは開くかも知れません。ご容赦の程

北太平洋浪高し

「…暇ですねえ」

「言っちゃ駄目だよ…でも、そうだねえ…」

瑞鶴の防空指揮所（艦橋の天辺）でグータれているのは深雪と桜。
いちおう「対空監視」についているのだが、そのモコモコな格好ではどうにも締まりがない。実際防空指揮所に詰める他の乗員達も緩い感じになっていた。

深雪はともかく眼鏡を着用している桜に対空監視は向かない。
実際彼女たちは望遠鏡も持たず、それどころか目をつむってじっとしている。

彼女たちは肉眼で対空監視をしているのではない。

術師育成の必須内容で術師ならば確実に修得している技能
『遠距離探査』
を実施しているところであった。

これは昭和に入って確立された技能で半径15？以内を遍く掌握できる優れモノである。

もっともベテラン見張り員にはとうてい及ばない。

だが、海面や地形の起伏、天候に左右されず確実に補足できるので

非常に重宝されていた。

本作戦においても荒れる冬の北大西洋で見張りが艦船、航空機を見落とす可能性があった。なので此方が発見されないよう、この術式を八田班は2人ずつ交代で実施していた。

ちなみに深雪に限っては20?先まで補足できる。

これはやはりレーダーというものを知っている彼女ならではのう。

連続してやると消耗するので30分を目処にその2人でさらに交代で実施している。

先ほどの会話は交代の際に交わされたものだ。

無論対空監視の補助だけではなく、彼女たちの実戦習熟訓練を兼ねてもいる。

その昔エライ人は言いました「一日の実戦は半年の訓練に勝る」と。

とはいえ、今の所そんな事もなく、艦隊は日付変更線にさしかかっていた。

平和なものだから現在では

「よし、交代。桜変わった〜」
「りょーかい」

「あ、斉藤中尉お疲れさまです。コーヒーどうぞ」

「あ、どもども」

「こっちはさつき酒保で買ってきた肉まんです。」

「わぁ、どうも有り難うございます」

交代を見計らって彼女たちは他の見張りや、見張りでもないのにこのタイミングを見計らって防空指揮所に出てくる非番の方々から様々な差し入れを受けている。

暖かいものがどんどん彼女たちに胃袋に収まる。

しかもである

吹きさらしの防空指揮所で任務にあたる彼女たちの頬は、寒さではんのり紅く染まっており、こんな寒いところで疲れている時に出される温かい飲み物などは本当に有難いので

「本当に嬉しそうな笑顔」

で謝辞を述べるものだからたちが悪い。

具体的には艦橋要員を筆頭に男共がハート^{バカ}を打ち抜かれた（既婚者も一部含む）

無意識でやっているものだからどうしようもない。

それでもちよっかいを出さないとところを見ると海軍軍人とは実に紳士であるらしい。

「なかよくしよつぜ抜け駆け禁止」の協定が結ばれた証拠はない。
無いったら無いのである。

「本作戦中、もつとも士気が高かった艦を挙げるとするならば瑞鶴であつた」と参加将兵が戦後口をそろえる理由はここにあつたのかも知れない。

まあ、世界広しと言えど、実戦に参加して

体重が増えて悲鳴を上げたのは彼女たちくらいなものであろう。

自業自得か。

原長官、及びその後呼び出された航母「赤城」で南雲忠一総司令長官から出された命令は以下の通りであった。

一つ、作戦発動まで八田班は瑞鶴勤務

二つ、作戦開始直前に空母6隻に分乗。諸般の事情で合成風力が得られない、不足気味の場合は『軽減』の術式をかけての発艦補助を行う。なお、「飛龍」「蒼龍」に関しては艦体が小さいので合成風力があっても爆撃機、雷撃機の発艦補助を行うべし。

「合成風力」とは、航母は陸上の飛行場に比べてはるかに短い距離で発艦（離陸のこと）をするために全速力で航行する事で向かい風をつくるのだが、その際風上に向かつて、向かい風の中を進む。この向かい風と航母が航行する事で出来る風を合わせたものを合成風力という。

だから風が強い場合は停泊していて、動かなくとも風上に舳先が向いていれば発艦できるし、風が無くても30ノット以上の全速力で航行すれば発艦できるようになる。ただし航母「加賀」は戦艦改造で速力が遅く28ノットしか出ないので向かい風が大前提。

直前に分乗なのは彼女たちの安全と以前にも述べた女性を乗せる事への幾ばくかの抵抗感が原因である。

三つ、攻撃隊発進後は『遠距離探査』により対空監視、ならびに敵

の攻撃を受けた際は『受け流し防壁』による損害回避を行うべし

これこそ彼女たち6名が呼ばれた理由であった。

今まで述べてきたとおり、空母は被弾に弱い。

しかも集中運用である今回は、一度に全ての航母が攻撃を受けかねない。

しかし『受け流し防壁』はそう言った問題点を解決できる。

それゆえ、彼女たちは本作戦に参加するのである。

伝達された際、楓などは指揮伝達の観点から赤城に乗り込んでおく事を意見具申したが、やんわりと断られた。

このあたり、やはり頑固というか旧態依然としている。

南雲という人間はじつは航空ではなく水雷、つまり魚雷とかが専門だったのでどうしても考え方が古くなりがちだった。

本作戦においても、この先においても、攻撃隊始め航空機の運用は殆ど専門家である源田実の言いなりであったと言われている。

ともあれ、八田班は航母瑞鶴にあって攻撃の時を待っている。

世紀の大作戦はもうそこまで迫っていた。

北太平洋浪高し（後書き）

続きに苦勞しています…

攻撃前夜

1941年12月8日

前日は対空監視も一切命ぜられず、英気を養う事に集中していた海軍「特務八田班」は現在、「瑞鶴」艦橋で最後の打ち合わせに入っていた。

「他の作戦参加航母には既に連絡済み、受け入れ用意は完了している」

「了解しました。ではこれより『転移』を行い、各航母に分乗、作戦準備に入ります。」

『転移』

それは日本術師協会が『治癒』や『念話』『斬撃』につづいて最初期に確立した技術の一つ。

明治以来、絶対数の少ない術師は陸海軍はもとより民間からも引っぱりだこであった。

今でこそ国家総動員法が出来、軍に出向してそこに長く居続けるようになったてはいるが、明治初めの頃、術師は民間の「一仕事」軍の「一作戦」ごとに出向いて術を行使する事が多く、文字通りの東奔

西走であつた。

故に考え出されたこの術式は

「20?以内の行つた事のある場所」

「目視できる5?以内の目標地点」

ならば一瞬で移動できる優れものである。

ワープやら時間遡航は文学や夢物語で結構古くからあつたためにイメージしやすかつたのであろう。例をあげれば「飛梅」の話がある。これは太宰府に左遷された天神、菅原道真を追つて彼の愛した梅が京から太宰府まで飛んだというものである。

ただし現状、動く船から動く船への転移は難易度が高いし、どういう訳か20?が限界であるとされていた。

一説にはこの術式は時空間に「穴」を開けて転移するのだが、20?以上になると術師が通り抜ける前にその穴が閉じてしまい、時空間の隙間から異物としてはじき出されてしまうのではないかと考えられている。

目視だと距離が5?以内と短くなるのは「脳内に無意識に記憶された転移先座標」ではなく「視覚情報、距離情報」などを「新規に書き込む」ので脳内の演算がかなり苦労するからではないかと考えられている。

まあもつとも…

当然のように深雪はこの限界を突破している。

ゲームとかでもの凄い長距離を「一瞬で移動する」というイメージなので「通り抜けるのに時間がかかるからはじき出される」というこの時代の常識から来る限界がない。

そもそも某国民的人気アニメで「どこにでも行ける扉」なんてものがあるのだから当然である

具体的には

「行った事のある場所ならば距離、状況にかかわらず転移できる」のである。

一度なんて大分沖で訓練中、呉に忘れ物をしてきたのを思い出して一瞬で取りに行った事がある。

楓はじめ他の班員からは「規格外にも程がある」と呆れられた。

何が言いたいのかというと

攻撃開始に先立つ12月6日深夜。

斉藤深雪は

最終確認、打ち合わせのために

瀬戸内海、広島は呉の戦艦「長門」に来ていた。

手には色々自分で改造した杖。

元々の細長い棒状から、若干ファンタジックな「魔法使いの杖」に
所々似ている形状に進化している。会議中に入り口で預けてあるが。

言うまでもなく第1機動部隊（第1航空艦隊に色々他の部隊を合体
させてつくられたハワイ作戦参加部隊。編成は作戦ごとに変わる事
になっている。）はハワイを攻撃可能範囲にあと少しで収める。

そんな場所から文字通り一瞬で内地まで飛んでこれるのは深雪だけ

である。

深雪のアドバイスで他の班員も『転移』の可能距離を30?くらいまで伸ばしつつはあるが、深雪の『超長距離転移』術式はそんなレベルではなく、他の班員は追いつくどころか足元にも及ぶ事がない。

この深雪の術式の唯一最大の欠点は他の術師の行使する通常の『転移』に比べて消耗が激しく、これほど距離が離れると3回がやっとで、2往復は出来ないというところ。

これは実験したのではなく「分かる」のである。

術師の特徴として「これ位が限界」というのを何故か自覚できる。

これは無意識に術式の行使に伴う高度な演算をやりすぎる事で脳が壊れるのを防ぐために発達した自己防衛本能によるのではないかと見られている。

まあ、寝れば回復するものの多用は出来ない。

本人は勿論の事、術師協会や楓はそう、認識していた。

ともあれ深雪は最終確認のため、呉に「転移」し、そこから連絡艇で戦艦長門に乗り込んで作戦室で連合艦隊司令部のお偉いさん達と顔を合わせていた。

「…しかし…まあ3回目か、本当に凄いな。『転移』とやらは。術師は皆出来るのか？」

「いえ。現状『超長距離転移』が可能なのは斉藤中尉のみであります。」

深雪の側にいる佐藤実少佐が宇垣参謀長の質問に答える。

佐藤実海軍に出向し、現在、長門に配属されている「特務佐藤班」の班長である。

深雪が長門に来る際は付き添う形で共に司令部の会議に出席するようになっていた。

ちなみに当のご本人は

（うわわホンモノだよ山本長官だよ連合艦隊司令部だよめっちゃ緊張するーっ！！）

かなり錯乱している。

無理もない。

お陰でまるで別人のように、それこそ借りてきた猫のように大人しくなっている。

それでも必要事項の伝達、書類の受け渡しはしっかりこなしているから彼女は実に優秀であると言えよう。

が、

「斉藤中尉」

「は、はいっ！」

こんな風に面と向かって呼ばれるとやはり緊張する。
なにせ相手は連合艦隊司令長官山本五十六である。

そんな様子の彼女を見て山本は苦笑せざるを得ない。

「そんな取って食おうと言う訳じゃないからビクビクしないで欲しいのだがなあ」

「も、申し訳ありません！！」

「まあ仕方ないのかな。ともかくご苦労さん。

明後日はいよいよ作戦決行だ。君にも全力で望んで欲しいから君に会うのは作戦前ではこれが最後になる。なにか質問など無いかね？」

「ええっと……いえ、ございません。」

「うむ。ならば艦隊に戻るように。次に会うのは作戦終了後になるだろう。…佐藤少佐、途中まで送っていきたまえ」

「ハッ」

深雪の受け答えは連合艦隊司令長官に対するものとしてはかなりギリギリではあったものの、術師は世界的に見ても大同小異で似たようなものがあり、——米国の術師は軍服すら着ないという——さらに深雪の能力は特殊な事情があると認識されていたためかなり大目に見られていた。

術師2名が退席した後 宇垣参謀長が言う

「長官。宜しいのですか？」

「なにがだい？」

…駄目だこの長官、上下関係におおらかすぎる。と宇垣は思った。色々この長官とは馬が合わない。

戦後しばしば取り上げられるが、この2人、この頃仲が悪かった。山本は黒島や渡辺を重用し、宇垣は大艦巨砲主義——開戦の雌雄を決するのは超々ド級戦艦だ——で航空部隊重視の山本とは根本から異なっていたのである。

ともあれこの長官の上下関係への無頓着は斉藤中尉に限った話ではないのだ。

たとえば納富健次郎という大尉がいる。この男、上官よりも先に敬礼を下ろす癖があった。本当にすぐに下ろしてしまうのである。

海軍司令長官である山本に対してもである。宇垣は眉をひそめたが、山本自身が全く気にしなかったので咎める事も出来ず。

そう言う風に山本はかなりおおらかで宇垣は逆にそこが気がかりであつた。

もつとも納富大尉の場合、その昔航空機の訓練から帰つてた際、その敬礼が原因で4?もある落下傘を背負つたまま飛行場内を走らされた経験があり、それでもなお改めなかったと言つから山本のおおらかさ以上に納富の筋金入りの頑固さというか、肝の座りっぷりが異常なのかも知れない。

ちなみに宇垣自身は同期であつても海軍兵学校や海軍大学校での成績が自分より下の人物であれば無視をしたとされ、下級者からの敬礼や挨拶には眼を逸らしたり「おう」とだけ言つて頭を後ろに反らす傲慢な態度を繰り返していたので、海軍内での評判は良くなかつ

た。

唯一彼が手放しで「名将」と絶賛したのが同期の山口多聞である。

「まあ良いじゃないか。無駄に細かいところに拘っていても育つ部下も育たない。」

「そうかも知れませんが…」

なおも拘泥する宇垣に山本は術師協会や軍令部から知らされて情報を開陳する。

「彼女は日本最強の術師と目されている。しかも未だ成長の余地があるという。

これほどの人材を潰しては陛下に申し訳が立たん。」

そうなのである。深雪の術式は7月に記憶を失ったのと引き替えに現下の日本魔術界において他者の追隨を許さないほどの隔絶した威力、精度を持つに至っていた。

実際は記憶喪失でなく、中身が入れ替わっているのだが、それは本人しか知り得ない事。

未来人であり、アニメやテレビのお陰でそう言ったイメージが実に容易だった事もあり、この時代の人間より魔術に親和性があったのかも知れない。

さきほど宇垣を呆れさせた『超長距離転移』にしても、間違いなく青い猫型ロボットの活躍するあの某国民的人気アニメによるところが大きいであろう。

ともあれ現在、「斉藤深雪は日本最強の術師である」という見方が海軍、術師協会の中では大勢を占めている。

しかも斉藤深雪という少女は元来「褒めれば伸びる子」だったので良く言えば波に乗り、悪く言えば調子に乗って、有り体に言えば調子に乗りまくって、さらに向上の兆しを見せていた。

ちなみに昭和の世界でこれに最初に気づいたのは楓で、以来深雪は楓に上手く操られていると言っても良い。

詳しく言つと

「深雪、お前なら出来る！！」
とか

「これくらい斉藤中尉には朝飯前だよな？」
とか

「これが上手く行ったら明日の掃除は免除だ！」
とかである。

後年、八田楓が斉藤深雪を評して
「アイツは本当に使いやすかった。」
とだけ言っただけなのは彼女にとって深雪が如何に育てやすい部下だった

のかを如実に表している。

連合艦隊のトップから異常な好評価を受けているとは思っても寄らぬ
深雪本人。

転移のために移動しながら疲れた顔をしている。

「はあああ……緊張しました……。佐藤少佐は凄いですね。あの長官
と将棋をされるそうじゃないですか。」

「いやいや、斉藤君の術のほうが遙かに凄いよ。」

両者お世辞ではなく本気でそう思っている。

佐藤の場合は山本とよく将棋を指していた渡辺参謀とのやりとりで。

いやあ長官には適いませんな。

いやいや君ほど僕と五分五分の将棋をできる人間をこの辺りでは知
らないよ。

ははは、嬉しい限りです。ですが長官、それは違いますよ。
ほう？

特務班長の佐藤少佐です。最近急に強くなって私じゃ勝てないくら
いなのです。

……面白い、今度一回やってみようじゃないか。

と言つのがあり、後日さつそく佐藤を呼びだしてやったところ、山本が珍しく連敗した。

周囲は佐藤に手加減してわざと負けるよう暗に支持したが山本本人にばれて失敗した。

以来山本は佐藤に将棋で勝つのを楽しみにして、たびたび勝負しているのだとか。

「では、ここで」

「分かりました。艦隊の皆さん、八田さん達に宜しく」

「はい。必ず。」

今度此方に来る際は作戦成功の連絡をお持ちしますね。」

「ハハ、期待してますよ。」

軍令部は「危険にすぎる」と最後まで反対したそうですからね。」

佐藤の言う事は事実であった。

なにせ最近まで「真珠湾への攻撃は米国艦隊を刺激して艦隊決戦を誘発する程度しかできない」との意見が大勢であった。

軍港内の戦艦部隊を航空攻撃で撃滅するのは至難の業で、実質不可能と見られていたからであり、やはり雌雄を決するのは戦艦同士の撃ち合いによる「艦隊決戦」でしかないと見られていた。

これに一石を投じたのが英国のタラント奇襲であり、山本長官はこれを参考に今回の真珠湾攻撃の具体的検討を命じたとも言われる。

だが、1941年9月に目黒の海軍大学校で行われた図上演習の結

果は散々たるものであった。

戦果は戦艦4、空母2隻撃沈。戦艦1隻、空母1隻大破と言っ
なかなものであったが、予想される此方の被害が空母3隻撃沈1隻
大破という、文字通り「刺し違える」結果となってしまったのであ
る。

この結果を見て、この作戦を検討してきた関係者は肩を落とし、軍
令部は自重を求めたが山本は自説を変えなかった。

「この頭上演習では空母4隻しか投入しなかったのでこういう結果
になったのだ。

もうすぐ最新鋭の大型空母が2隻竣工する。6隻でやれば問題ない」

これが山本の考えであり、瑞鶴の工期短縮の原因であった。
見方によつては真珠湾攻撃は瑞鶴の完成を待つて行われたとも言え
る。

ともあれ艦隊が出撃したこの時点でも「危険な博打」という見方が
大勢であり、職を賭した山本にとつても、
帝国海軍にとつても、

いやそれこそ大日本帝国にとつても文字通り「出せるもの全て出し
て」の一世代の大博打なのであった。

だが

「まあ何とかありますよ」

歴史を知る深雪はあっけらかんと答える。

「ほう、何故だい？」

佐藤は興味深そうに答える。

深雪は茶目つ気たつぷりに答える。

「実は私、未来が見えるんです」

「…なにい！！！！？？？？？」

「冗談です」

「……………中尉、中尉の冗談はしゃれにならんで注意するように。」
佐藤の吃驚したり、注意したりは実に的を得ていた。

本人に自覚がないのが大問題なのだが、齊藤深雪は

「術師の常識を変える存在」

として術師協会からも注目されている。

山本五十六も回顧録で

「彼女の登場によって、航母と同じく「術師」もそれまでの補助戦力という位置づけから戦争の雌雄を決する決戦戦力に躍り出る可能を得たのではないかとこの時私は思っていた。」
と述べている。

この山本の予想が現実となるか、この時は誰にも知り得ない事であ

った。

ともあれ彼女が冗談で言ったとしても、それは大きな影響をもたらす。

「彼女なら出来かねん」という風になってしまつのである。

「申し訳ありません、以後注意します。」

「そうして下さい」

相手は階級問わず丁寧に対応する少佐だが、上官である事に違いはないし、彼が心配してくれている事はよく分かったので、深雪は素直に謝罪する。

「では、失礼します。」

そう言つて、一瞬の光の後、深雪の姿はかき消えた。

「…もしかすると…やはりそうなのか?…」

思い詰めた少佐の顔を見た者は月の他になかった。

「ただいま戻りました」

「おう、ご苦労。GFは何か言つてたか?」

GFとは連合艦隊司令部の事。

過去2回の連絡では色々最終確認やら微調整で書類をどっさり持つ

て帰ってきた深雪だが

「いえ、本日は特に何も。「各員一層奮闘努力し、よく任務を全うすべし」とだけ。あと八田さんに宜しくと佐藤少佐から」

「そうか。では明日は作戦前の休養と言う事で監視などはしなくて良いとの事だ。

一日しっかり休んで英気を養っておくように。深雪は厨房に近づくな。」

「「「「「了解」「」「」」

「ってなんでさらっと最後に私だけ!？」

12月7日

そんな訳で特務八田班は久方ぶりにのんびりと過ごす事になる。

「のんびりと言ってもねえ…」

「特にする事もないし…」

「愛機の手入れも終わっちゃったしねえ。」

訂正。暇をもてあましていた。

攻撃前夜（後書き）

なんか妙に大学が忙しくなってきたので不定期更新になります

発進！

12月8日早朝

「ただいま到着いたしました特務八田班班長、八田楓であります」
「うむ。宜しく頼む」

特務班の面々は「転移」を行い、それぞれの航母で待機していた。
八田楓は班長なので総司令部「赤城」に乗り込む
同様にして副班長 東堂恵理は第二航空戦隊のある「飛龍」に。

高須賀桜は「蒼龍」

大山夏は「加賀」

山崎冬は「翔鶴」

我らが斉藤深雪はそのまま「瑞鶴」を担当している。

これは攻撃終了後、呉の「長門」に直接報告して貰うために、「転移」による消耗を避けた為である。

…と、言っても深雪本人は「転移」を艦隊内でしたくらいでは全く問題なく『超長距離転移』出来るのだが…。規格外である。

「『軽減』については航空機のバランスが崩れるので、爆弾・魚雷に変更とお聞きしましたが、宜しかったでしょうか？」

「うむ。機体全体にかけてもらって問題はないとは思うんだが、念のためにな。」

「機体全体となると何度もかけると術師への負担も大きい。他にも色々として貰わんといかんなでな、爆弾、魚雷の重さが無くなるだけでも十二分であるし。」飛行隊長淵田美津雄、航空参謀源田実が答える。

最初は機体全体にある程度の軽減をかけてもらうつもりだったのだが、軽くなると逆にバランスが崩れかねない事が大分での訓練で判

明し、積載物への軽減に変更されていた。
具体的には航空爆弾と魚雷である。

99式艦上爆撃機の場合は25番、つまり250？なので軽減はま
あなくてもよい。（あった方がよいのは勿論である）が、97式艦
上攻撃機はそうも行かない。航空魚雷にしてもそうだが、水兵爆撃
を行う機体は80番つまり800？者爆弾を抱えて飛ばねばならな
い。

これは2列に並ぶ停泊戦艦にたいし、魚雷では内側の戦艦を叩けな
いので開発された新兵器。

と、いつても実は戦艦「長門」の41？砲（40・6？ではない）
の弾を改造したもの。戦艦の重防御、装甲を打ち抜く性能があると
認められたが、800？もある。これらの重量のある積載物を発進
時に軽くするのが特務八田班の最初の実戦任務となる。

もつとも、軽いままでは威力も落ちるので（運動エネルギーが減少
してしまうから）途中で徐々に術式の効果が切れるように設定され
ている。

「了解しました。では揚爆弾筒、揚魚雷筒に向かいます。」

揚爆弾筒、揚魚雷筒とは艦底付近にある航空爆弾、魚雷格納庫から
それらを取り出す筒の事である。ここから出されたのを専用台車に
乗せて飛行機の下まで運び、取りつけていくのだが…

攻撃開始1時間前。

いつもは喧噪の中、汗を流して取りつけ作業を行い、速やかに出撃
できるよう身を粉にして働く整備員、格納庫要員なのだが…

「よっし！8番機、魚雷取りつけ完了！！次行くぞー！！」

「うーっす！！」

今日に限っては実に軽やかにそれほど汗もかかず

通常の倍以上のスピードで取り付けを完了していた。
と、言うのも作業開始早々。

「か、軽い…」

「これが術師か…」

「嘘だろ…25番を一人で運べるぞ…」

と言う事があり——なにせ25番すなわち250?爆弾を一人で担いでいけるのだ——あまりの軽さに安全装置をうっかり解除しないように「逆に」注意しながら、さくさくと作業を進めていた。ちなみに航空魚雷、800?爆弾はサイズもデカイので——重いからではない。一人で運ぶと細長い形状ゆえどこかにぶつけれないからである——3人がかりで取りつけていた。

結果として思わぬ誤算が起きた。
具体的には…

「…それで第3部隊は」

「失礼します!発進準備、間もなく完了します!」

「「「「「「「「早すぎだろ!」「「「「「「「「」

ブリーフィング半ばの全搭乗員がつっこんだ。

見るといつもならまだ格納庫から出し切ってもいないはずの彼らの愛機はすでに暖気運転(慣らし運転、ようは離陸可能段階)に入り、整備員達がチョーク(航空機用の車輪止め)を着けて待機している。兵装も全てつけ終わり「あとはパイロット乗せて」状態である。

「ちよ、ちよつと待て！最終確認だからすぐ終わる」
珍しく淵田が慌ててブリーフィングを当初の半分で済ませる羽目になった。

かくて第一航空艦隊旗艦赤城に伝説のあの旗が翻る。

Z旗

言わずと知れた日本海海戦で掲げられたもので、以降日本海軍は大作戦ではこの畑を使うのが慣例化した。実際にはDG旗という同じ意味の別のを使った筈らしいが、そこは魔術がある、すなわち微妙に異なる異世界の太平洋戦争。しっかりZ旗を掲揚している。

『皇国ノ興廃此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セヨ』

全航母で全く同じ命令が出される。

零式艦上戦闘機（ゼロ戦）99式艦上爆撃機、97式艦上攻撃機の順で、6航母から第一波空中攻撃隊合計183機が発進する。艦隊は爆音で包まれ、その上空は瞬く間に日の丸の翼に埋め尽くされた。荒鷲達はあつという間に南の空へと飛び去っていく。

その光景はまさに威風堂々としており、深雪達始め全乗組員は帽振れで見送った。

彼らの行く先には未だ眠るアメリカ艦隊を抱いた真珠湾がある。寧猛達の揺りかごに刻一刻と危機が迫っていた。

同時刻

真珠湾停泊 アメリカ太平洋艦隊 空母「エンタープライズ」にて

「ウェーク島への輸送も終わったし、しばらくはのんびり出来るな」
「馬鹿言え。何のための輸送だ？日本が何かしでかすかも知れないからだろ？」

「だとしてもここにや関係ないさ。」

「そうだけどう。…のんびりしてたらブルにしかれるぞ？」

「大丈夫大丈夫。ブルならさっきジョージとどっかに行ったぜ」

「へえ。あの2人仲がいいねえ。」

「馬が合うんだろ。どっちも西部劇に出てきそうだし」

「…悪人の役はブルだよな？」

「ああ、それも最後に男気見せる憎めない悪役だ」

「こらっ！！貴様ら、何油売ってやがる！！さっさと仕事しねえとブルに噛みつかれるぞ！！」

「は、はいっ！！」

2人は思う。上官殿、貴方も「ブル」と呼んでまず、提督の事、と。

同時刻。

「ハックシヨイ！！」

「オウ、ボス。風邪でもひいたんじゃないか？」

「馬鹿言え。この大事な時期に風なんぞひいてられるか」

カウボーイと提督がホノルルの町を闊歩していた。

何とも言えない組み合わせに早朝ランニングの皆様がどうしても見てしまう。電柱にぶつかつた人も複数いたりする。

「ボスは心配性だなあ。ジャップがここまで来る訳無いでしょうに」
「馬鹿者！ここに来なくてもフィリピンに来る。そうなったら全速力で俺たちは行かねばならん。ハワイだからと言って気を抜いてたら寝首を掻かれるぞ！」

提督の言う通り、アメリカは日本軍はまず南方攻略にかかると見ていた。

なのでそれに対応できるよう、艦隊の集結、整備・出撃準備に余念はない。
その集結が徒となるのだが、この時点では誰も知りようがない事であった。

「注意しときます。ところボス、今向かつてる先は？」

「？友人宅だが？」

「こんな朝早くから行って良いんですかい？」

「問題ない。アイツは昼夜が逆転しかけてるからな。今頃アフタヌーンティーだろう。やつが日曜礼拝なんてしたら明日は最後の審判だ。」

「…その人、大丈夫ですか？」

「気にしたら負けだ。お前さんとも気が合うと思う。」

「だと良いんですがねえ…魔術師と気の合う人なんて多くはないですよ？」

駆逐艦が日本の特殊潜航艇を撃沈、報告したのである。

しかしそれまでも誤認、誤射がたびたびあったためこの報告は重視されず、ハルゼーにも知らされなかった。

当然彼と共にタクシーに乗る「魔術師」ジョージ・フィリップも日本軍の真珠湾攻撃を察知する事が出来なかった。

さし当たっての彼の懸念は。

「…お客さん達、同僚で友人宅に向かっているんですよえ？」

「そうだが？」

「…ではその拳銃は何ですか？」

銃社会アメリカなので運転手も慌てず質問をする。
なにせ相手は有名な提督だし、防弾ガラスもある。問題はないだろう。

運転手にハルゼーは自信たっぷりに答える。

「ハハ。ちょっとしたコントさ。」

「だったらセーフティー解除すんな!!!!」

「大丈夫さジョージ。弾はしっかり入ってる!」

「全然大丈夫じゃねえ!!!!!!!!!!」

早朝のホノルルに哀れなカウボーイの悲鳴がこだまする。

時アメリカ時間1941年12月7日 午前7時10分

攻撃隊到達まで30分と迫っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001ba/>

太平洋「魔」戦争

2012年1月13日07時45分発行